澪電

2013. 4　No. 34

電気系E3棟屋上に設置された
フェーズドアレイ気象レーダ
（9ページに詳細記事があります）

目　次

会長ごあいさつ（吉野勝美）…… 1
講演会からの話題 …… 3
話　題 …… 6
母校のニュース …… 7
教員紹介 ……11
退職された先生方の近況 ……12
卒業生の近況 ……13
学生の声 ……15
会員の方々のご活躍 ……18
教室情報 ……19
卒業者・修了者就職先 ……20
澪電会役員 ……22
支部連絡先 ……23
同窓会だより ……24
澪電会だより ……28
賛助会員募集について ……33
クラス委員 ……34

大阪大学工学部電気系同窓会

澪　電　会

ホームページ：http://www.reidenkai.jp/

平成25年４月

平成25年度大阪大学澪電会総会・懇親会ご案内

澪電会会長　吉野　勝美

拝啓　陽春の候　会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、平成25年度澪電会総会ならびに懇親会を下記の通り開催いたします。昨年は130名を超える卒業生や先生方が出席され、大盛況でした。母校の先生方を交えて、先輩、後輩、同期生の方々が一堂に会して旧交を温めつつ、情報交換を行う絶好の機会でございます。また、総会・懇親会にあわせて日頃ご無沙汰の同期会を企画されるのもよろしいかと存じます。

昨年同様、本年も講演会を企画いたしました。最新の話題についてご講演いただく予定ですので、皆様お誘いあわせの上、多数ご参加下さますようご案内申し上げます。

敬　具

記

日　時：　平成25年６月７日（金）　17：00～20：30

会　場：　新阪急ホテル（〒530-8310　大阪府大阪市北区芝田1-1-35、TEL：06-6372-5101）
講演会・総会「花の間」、懇親会「紫の間」

次　第：　１．講演会　17：00～18：00
「『知者不博、博者不知』－老子81章」
大阪大学名誉教授　長谷川　晃　先生
２．総　会　18：00～18：30
３．懇親会　18：30～20：30

会　費：　学部卒業平成16年度以降の方　7,000円
学部卒業平成15年度以前の方　10,000円
会費は当日申し受けます。懇親会のみのご参加も歓迎いたします。

準備の都合上、出欠のご返事を同封のはがきにて、来る５月24日（金）までにお知らせください。

表紙について

表紙の“澪電”は、熊谷信昭大阪大学元総長（通信・昭和28年旧制）の揮毫によるものです。

会長ごあいさつ

歴史と伝統、自らの力に自信と誇りを持とう

澪電会会長　**吉野　勝美**

浅学非才の身であります私が澪電会会長職をお受けした当時、我が国は極めて厳しい状況にありました。天にも見放されたのではと思うほどの未曽有の大地震、巨大津波の大天災とそれにより引き起こされた福島原発の深刻な大事故、それらに迅速に対応できない時の政権与党の稚拙な処理能力、対応が遅れるどころか全くの無能、無策と云っていいほどのお粗末、それを見透かした近隣諸国の非常とも思える政治的対応、もちろん経済も底知れぬ沼に落ち込むような感がありました。我々電気、通信、電子、情報分野においても極めて厳しい状況になり、方向性を見失い、途方にくれそうな雰囲気もありました。そんな中にあって筆者は何よりも自らの歴史と伝統、力に自信と誇りを持つべきであることを、もちろん対応には謙虚さが必要なことは云うまでもありませんが、云い続けてきました。

昨年12月政権交代があって、安倍首相がきわめて明瞭な、かつ明るい指針を掲げ、それこそ自信にあふれ、自らに誇りを持つような雰囲気になり、明るくなった方が多かったように思います。それに、合わせて株価上昇、為替相場が適切な方向に向かって動き始め、産業界も分野によっては明るい状況になってきました。この状況が続けば我々澪電会の主として関係する分野も必ず良い形になってくるものと確信しています。

歴史と伝統、自らの力に自信と誇りを持つべきことの例として、前澪電会会報では皇太子殿下が島根県産業技術センターにいらっしゃった時、クマン蜂の羽根のお話を申し上げたことを記載し、“クマン蜂は飛べると信じているから飛べるのです”と云う話をしましたが、小生の周辺にはそのような気持ちになる方が少しずつ多くなってきているように思えます。そんなことが理由ではないと思いますが、最近とみに思いもかけなくいろいろな方が訪ねていらっしゃることが多く、自らもそのような気持ちを新たにしています。

この２月の末、生け花の小原流の第５世家元のご訪問を受けた。なぜまったく関係があるとも思われない小生の所に来られたのか分からなかったが、どうも小原流のルーツを探るという考えで、開祖が松江出身であられたことから、その地に熱い思いの人に会わせようという考えの方が周囲におられたようであります。二時間近くにわたって、小生の子供の頃の宍道湖の様子も含めた写真などを交えて熱くお話をしたが、小原流の原点を含めていろいろなことが理解できた、認識できたと随分喜んでいただいたようであります。第５世は20代の若さであるが、そのような思いがあったものと思われ、誇りと自信、自らに与えられた責任をしっかり感じられておりしっかりされていました。若い澪電会会員も気持ちの持ち方次第ですぐにでもリーダーになれると考えています。

皇太子殿下にお話ししたもう一つの“蚤の曲芸”の話は、上から抑えつけたのでは折角の持てる能力が発揮できないどころか殺してしまうということを云った、どちらかと云うと上位の方を戒める言葉であります。小原流の若い家元さんのように、若い新しい澪電会の会員が持てる能力を最大限発揮できるよう、自由な活動を許し芽が育ち大きな飛躍ができるようにすべきということであります。

さて我々澪電界の会員が多く所属あるいはかかわりを持っている電気、通信、電子、情報の産業分野は一部を除き極めて厳しい状況の所もあるが、こんな中にあっても我々澪電会会員は、こんな時こそ大阪大学電気系出身であるという意識を新たにし、歴史と伝統、自らの力に自信と誇りを持って事に臨むべきであり、後輩に指針を与え、方向付けをし、また会員同士が切磋琢磨するとともに互いに協力し良い方向に導くべく大いに努力すべきであると思っております。

どこかで述べたことがありますが、戦前の我々電気系の教育レベルは非常にしっかりしてレベルも高かったことを示す貴重な資料である昭和16年大阪帝国大学

工学部電気工学科をご卒業なされた先輩、池田盈造さんが受講され、記録された講義ノートがご家族から澪電会に十数年前に送られていました。そのことを確認するとともにあらためて意を強くしたので、これを多くの方の目に触れていただきたく、昨年12月初め講義ノートを複写する形で本にまとめ、最初の所に少し小生の駄文を添えて、“古い大学講義ノート　電磁気学講義録池田盈造、監修吉野勝美”としてコロナ社より出版しました。講義ノートは膨大であり順次出版する予定にしています。恐らく読まれる方はあまりいないと思っているが、眺めるだけで戦前にこういう教育があり、そこに真剣に学ぶ学生さんがあって、戦後電気系分野の産業の著しい発展があったということが理解されます。この本は監修者自らが購入し全国の電気系学科を持つ大学の図書館に寄贈するつもりであるので一度目にしていただける方があったらうれしく思っています。

昔から云われる温故知新は普遍的に重要なことでありますが、とりわけ今の時代に必要なことと思っております。そんな中で同窓会組織澪電会はますます大事な役割を果たすことができるように思います。後輩、若い人は先陣に学ぶに越したことはなく、学ぶべきことがたくさんあると思うし、また先人は教える義務、伝える義務があるように思うこの頃であります。

ともかく、この平成25年に入って新しい政権の下非常に明るい兆しが現れ、良い流れが始まったように思います。これがさらに発展し電気系分野はもとより産業界が大きく発展することを確信しており、澪電会の若い会員、学生さんには前向きに明るく全力で取り組んで活躍していただきたいものと思っています。

講演会からの話題

雷に魅せられて

大阪大学
電気電子情報工学専攻
教授
河　﨑　善一郎

澪電会総会では「雷に魅せられて」と題して講演をさせて頂きました。実はこのタイトルは、拙著（随筆版元：化学同人）と全く同じタイトルになっています。いや、実を申し上げますと、学内外で講演依頼を頂くたび必ずと言っていいほど「雷に魅せられて」のタイトルや副タイトルをつける様にしているのです。

と言いますのも、雷放電の研究と言いますと多くの方々に、それだけで古くさいと思われがちだからです。つまり「雷放電は雲の中の電気的現象である」ことが明らかにされたのは、1750年代の事ですから、既に二世紀半も経っていて、科学という観点からは決して新しい主題であるとは言えないかも知れないからです。それでも、我々大気電気学者から見れば、まだまだ未解明の課題がありますので、聴衆の方々の「古い」という先入観を、すこしでも払拭したいという切なる願いを込めての演題で、私にとっては小道具といったところなのです。

さて、講演の最初に紹介させて頂いたのは、ベンジャミンフランクリンに遅れること、わずか50年で我が国にも似たような実験をした科学者がいたという事実です。それは江戸時代末期の事で、鎖国していた時代ですから、なんとも驚きです。つまりあの時代においてさえ、文明先進国から知識を得てという努力が、我が国の先達によってなされていたことを知るだけでも、そしてそのことを聴衆の方にお伝えするだけでも、講演させて頂く意義のあることは間違いないと考える次第です。その後講演では、着氷電荷分離機構、地球電気回路といった、大気電気学の基本的な事項を引き続き説明申し上げました。特に前者・着氷電荷分離機構は「雷雲の中に電荷が蓄えられる仕組み」の、現時点での我々大気電気学者共通の理解になっており雷の電気は、決して摩擦電気ではないことを強調させて頂いたつもりです。

引き続いて、いささかおこがましいとは思いながらも、私の取り組んできた「雷嵐（らいらん）の観測的研究」にとって必要不可欠な「世の中にない新しい装置を、考案・製作する」ことの重要性を申し上げ、雷放電研究に取り組んだ30余年を総括させて頂きました。そして大阪大学グループの誇るVHF波帯広帯域干渉計を紹介し、最近の観測結果と共に新しい知見を披露させて頂きました。干渉計に関わって正味四半世紀、卒業生やスタッフの皆様の努力もあって、その機能は「ほぼ完成」と言える程度にまで高められたことも申し上げました。さらには研究室で准教授の牛尾さんが中心となって開発してきました、高時間・高空間分解能の広帯域Ku帯レーダも、完成域に近づいてきていることも説明し、雷放電研究のための能動型および受動型両装置を兼ね備えた研究室の出来上がったことも、申し上げました。このほか私が34年間大学人として携わってきた、ロケット誘雷実験やレーザ誘雷実験の成果を紹介しましたし、10ヶ国に及ぶ海外観測についても言及しました。どれもこれも、私にとっては、研究者としての原点の一つに違いないものと、確信いたしております。

最後になりましたが私が、雷に魅せられたその理由です。その一は、最初に述べた江戸時代の雷の研究者が、私の生まれ育った泉州貝塚の隣町の人だったこと、その二は、子供の頃から科学者になりたいという夢のあったこと、あたりでしょうか。大学に入って間もないころ、吹田万博で見た「月の石」の影響も大きかったと、理解しております。そして定年退職の後も、雷を追いかけたいと考えております。

講演会からの話題

情報スーパーハイウェイへの坂道

大阪大学大学院情報科学研究科
情報ネットワーク学専攻
教授
村　上　孝　三

私は、昭和48年に電子工学専攻喜田村研究室を修了した後、富士通研究所に入社し、22年在籍した後、平成７年に大阪大学教授に就任いたしました。大学では、喜田村善一教授、寺田浩詔教授と続く伝統ある研究室を継承させていただき、現在、インテリジェントネットワーキング講座を担当しています。この間一貫して情報通信分野でネットワークインフラ技術の研究開発に取り組んでまいりましたが、インターネットの大きな発展にも関わらず、目指すべき安全で安心な情報スーパーハイウェイの実現にはまだかなり険しい道のりであること、そしてネットワーク基盤の安定なくして頻発する社会の諸問題の解決は難しいという趣旨のお話をいたしました。

私が研究の道に入ったのは、ディジタル時代の幕開け時期でした。最初のテーマである「ディジタルハイウェイの研究」は、電子交換機の次世代機であるディジタル交換機の研究開発でした。我が国初の電子交換機の開発は喜田村研究室なのですが、入社してからこのことを知る有様でしたが、卒業生であることに大いなる誇りと責任を感じたものでした。この研究は、NTT研究所（当時電電公社）と日本電気、富士通、日立製作所、沖電気のメーカ４社の共同研究に発展し実用化まで関わりました。地上最大のシステムと言われた交換機の開発を通して、複雑系システムの機能記述法、設計コンセプトの重要性、組織体制、人材育成、マネジメントサイクルなど大規模・複雑システムの開発手法について多くのことを学びました。この経験をベースに大学における教育、研究では、システム開発力、システムセンスをこれからの情報化社会で身に着けるべき最も重要なスキルであると重要性を強調してきました。

ネットワークの次の課題は音声、データ、画像の統合交換をいかに実現するかということでした。この研究では開発に先行して国際標準仕様の策定を行う初めてのケースとなり高度情報社会を目指す各国のホットな議論を経て、ATM（非同期転送モード）通信技術が創成されました。中でも米国は国家再生戦略としてギガビットネットワーク（情報スーパーハイウェイ）の構築に国を挙げて注力しました。そのプロジェクトで最初に採用されたのが私達が最初に実用化したATM交換機でした。私は国際標準化初期段階の京都会合に出席したのを契機にこの研究にのめり込み、標準化はNTTが主導されましたが、メーカとしてシステム実現技術の面から研究を進めました。新たに考案した自律ルーティング方式が大規模システムへのスケーラビリティがあり、またATMスイッチモジュールの超高速LSI化を可能にしたことでシステム実用化が実現でき、米国ノースカロライナ州情報ハイウェイ等に採用され、現場実験を通して次世代ネットワーク構築計画に貢献できました。しかし、その直後に米国の財政・経済不況、日本の経済バブル崩壊等が勃発、次世代ネットワーク基盤構築計画は頓挫しインターネット時代に転換しました。

この時期に大学に異動することになり、次の研究課題は情報通信サービスのパーソナル化でした。そのキーはインテリジェントネットワーキング技術と臨場感映像通信のための全光ネットワーク技術であると考えました。前者はソフトウェア、後者はハードウェアの別個のブレークスルーが要求されますが、これまでの経験から別々の要素技術として研究が進むものではなく、ネットワークアーキテクチャのパラダイムシフトによってシステム構成面から両者を一体と考えて研究することが重要であると考えました。

まず、ユーザ要求をパーソナルエージェントとしてモジュールソフトウェア化する技術とその移動ソフトウェア処理技術、ネットワークを可視化するためのネットワークマップの研究を立ち上げました。また、最近のスマートフォン時代に顕在化しているように異種キャリア環境下での高度で多様なサービスを迅速に開発する技術として、サービス制御・ネットワーク制御一元化技術とサービス開発プラットフォーム化の研究開発を新世代ネットワーク向けに行っています。

一方、高精細動画像技術の急速な発展に対応するためのブロードバンド化について、現状の千倍、百万倍

のネットワーク容量の増大が必要となります。ディジタルコヒーレント通信により光ファイバ通信の大容量化は進んでいますが、光ルータ、光交換機などの光化は遅れており全光ネットワークの実現が期待されます。自律性を持ったホロニック光ネットワークアーキテクチャ、光スペクトラム拡散スイッチ技術、ネットワークマップと連携したフロー型経路制御技術などの面から光交換システムの研究を進めており、光メモリ、光波長変換などの新基盤デバイスの研究に反映させたいと考えています。

また、将来に向けては情報だけでなくヒト、モノ、カネ、さらには交通、物流、エネルギーなどライフラインを含むあらゆる社会活動がネットワーク基盤に統合化されてゆくものと考えられ魅力的な研究テーマが山積しています。

このように次世代の安全で安心な情報ネットワーク社会基盤の実現には課題はまだ非常に多く、技術の研究だけでなく、将来ネットワークの在り方、科学技術の研究開発手法、若手人材育成等の多角的視点からの検討が重要です。日本学術振興会産学協力研究委員会光ネットワークシステム技術第171委員会を委員長として主宰していますが、産学官連携による革新的研究を加速する場となるよう尽力する所存です。

話　　題

エネルギー基本計画策定への期待

大阪大学
名誉教授
辻　　毅一郎

新しいメンバーで再構成された総合資源エネルギー調査会総合部会が、今年３月15日に第１回目の会合を開き、我が国のエネルギー政策の方向性を定める「エネルギー基本計画」の検討を開始したことが報道されています。前政権では基本問題委員会という委員会で一年間に33回という多数の会合が開かれました。最近は議事録・配布資料等が公開されていますので、筆者はそれでフォローしていましたが、将来の原子力発電への依存度についてゼロ、15％、25％の三つの選択肢が示されたものの、最終的に議論は収束しなかったようです。その後、昨年９月にはこの議論を踏まえ、「2030年代に原発稼働ゼロを可能とするよう、あらゆる政策資源を投入する」とした「革新的エネルギー・環境戦略」がエネルギー・環境会議で決定されましたが、閣議決定には至らず、エネルギー基本計画も策定されないままになっていました。現政権は上記の総合部会でその戦略を見直すとしており、今後の議論が注目されます。

原子力安全神話というのは、今から考えれば筆者も信じていたといわざるを得ません。専門技術者が十分に配慮し、何重にも何重にも安全ループが形成されているから安心していて良いはずと思っていたのです。ところが、事故後に見聞したところによれば、どうやら心ある技術者から安全上の改善要望があったのに、適切な対応がなされていなかったのは確かなようです。我々は深く反省し、安全性を高める研究を重視して行かなければなりません。

将来は、再生可能エネルギーの導入可能量を大幅に増やし、原子力への依存度を下げて行くことが望まれます。しかし筆者は原子力の再稼働を全く認めないという選択（現に停止しているので供給できない訳ではないことも分かりますが）は疑問に思っています。まず、再生可能エネルギーの大量導入により原子力発電分をすぐに代替できるかというと、とくに関西地域の場合はその量の大きさに圧倒されます。電気系の同窓生諸氏は良くご承知と思いますが、100万kWの原子力発電所からは設備利用率80％を仮定すると年間およそ70億kWhが発電されます。これを太陽光発電だけで代替するなら、設備利用率は12％強なので約600万kW（パネル設置スペースは約80～120平方キロ）、陸上風力の場合は20％なので400万kW（2.5MWの風車約1600基）となります。関西の原子力発電所は震災前の十数年間、毎年600～750億kWhを供給してきました。これを置きかえることになると…。ちなみに、現在全国レベルで盛んに検討されている将来の導入イメージは2030年で太陽光発電5300万kWです。

やはり化石燃料による発電で補わなければならず、燃料費は増加し、地政学的な問題も生じてきます。石炭火力を新設すれば燃料費は石油・天然ガスに比べて相当低いですが、CO_2がより多く発生するので、地下貯留技術などを実用化しなければなりません。原子力発電の重大事故に隠れて地球温暖化問題への注目度が低下しているようですが、大気中のCO_2濃度は依然として毎年増加を続けています。この点も見過ごすわけにはいきません。いずれにせよ、電力の供給コストは上昇し、経済への影響が懸念されます。

昨年の基本問題委員会では、いくつかのコンピュータモデルを用いて、将来の電源構成の社会経済的影響を定量的に評価し議論していました。今度の総合部会でも、そうしたモデル分析に基づく議論が再び行われるものと思います。筆者個人の意見としては、安全性を改善することを前提として、原子力を基幹電源の１つとしつつも、再生可能エネルギーの大量導入を可能とするスマートグリッドなどのコア技術を鋭意進めるという方向ではないかと思います。ともすればエネルギー基本計画は国が作るもので、我々はそれに従えば良いという風潮が感じられないでもないのですが、同窓生諸氏には国の将来に関わるエネルギー基本計画の策定プロセスに更なる関心を寄せていただきたいと思う次第です。

母校のニュース

溝口理一郎教授　最終講義

電気電子情報工学専攻（産業科学研究所）教授・溝口理一郎先生は、平成24年９月30日をもってご退職されました。ご退職にあたり、平成24年９月20日（木）午後３時半より、大阪大学産業科学研究所講堂にて、最終講義が行われました。当日は、工学研究科・産業科学研究所の教職員、学生はもとより、学外からもゆかりのある方々が多数聴講に来られました。まず、産業科学研究所・八木康史所長のご挨拶の後、司会の松本和彦教授（産業科学研究所・第１研究部門長）より、㈳人工知能学会会長や国際学会会長・副会長などをご歴任された、溝口先生のご略歴が紹介されました。その後、「オントロジー工学の過去，現在，未来－あるオントロジー工学者の自分史－」と題した最終講義がなされました。長年にわたる様々な研究成果を、初期の「パターン認識、音声処理とデータ解析」、中期の「知的CAI、エキスパートシステム、知識工学」、後期の「オントロジー工学」の３つの時期に分けてご講義を頂きました。

初期のパターン認識に関する研究においては、人間の聴取実験データなどから定量的な評価値を導出する手法を開発され、Pattern Recognition Societyより論文賞を受賞されました。また、音声処理の研究においては、音声パラメータ遷移の画像データから音声認識する人間の能力を計算機によって模擬した連続音声認識エキスパートシステム　SPREXを開発され、電子情報通信学会より論文賞を受賞されました。中期のエキスパートシステムに関する研究においては、当時の主流であった専門家の経験則をプロダクションルールでコーディングする手法の欠点を克服するために、深い知識と知識コンパイルという概念を提案され、対象の構造と領域における基盤知識を組み込んだ、より高い知識再利用性と状況対応力を持つエキスパートシステムを開発されました。

更に、エキスパートシステムの知識を、診断や設計などの問題解決（タスク）に関する知識と、問題対象領域（ドメイン）知識に分離する方法論を提案されました。当初はタスク知識をタスクオントロジーの原型とも言える汎化語彙と言う独自に生み出された概念で記述されておられましたが、その方法論と、後に出会うことになったオントロジーとが同一であることを知られ、タスクオントロジーとドメインオントロジーという新しいオントロジー分類を提案されました。タスクオントロジーは、AI分野において日本人が発信した概念のうち世界で広く使われている数少ない例となっています。

そして、一挙に後期のオントロジー工学研究を展開されました。「物事に共通する本質を見抜くこと」と「類似する物事の厳密な差別化をする鋭い分解をすること」というオントロジー工学の心から説き起こされ、基礎理論から様々な対象領域における応用展開まで幅広い研究成果をご紹介されました。具体的には、属性などの扱いで他を凌駕する日本初の上位オントロジーYAMATO、世界最先端のロール理論、人工物と生体の機能の統一的理論、学習・教授理論の包括的体系化といった理論的なものから、ロール概念を適切に扱える世界唯一のオントロジー構築・利用環境「法造」といった基盤ツール群、機能理論に基づく製造業における工学知識共有、学習・教授理論に基づく授業計画支援、サービス、医療（疾患）、遺伝子といった各領域を対象としたオントロジー構築と実用展開に至るまで多くの画期的な研究成果をご紹介頂きました。オントロジー工学の黎明期より研究を開始され、世界的にも先導的研究を行ってこられ、特に日本においてオントロジー工学の第一人者として、AI研究のあるべき姿として「内容指向研究」を広く啓蒙し、多くの論文、解説、著書をご執筆され、多数の賞などを受賞されたことを改めて知らされるご講義でした。

講義終了後、長年にわたる先生の御活躍を讃えると共に感謝の意を込めて事務員の橋本朗子さんから花束

溝口理一郎教授　最終講義の様子

が贈呈されました。その後、大阪大学産業科学研究所・楠本会館において、懇親会が開催され、多くの方々に囲まれての和やかなご歓談が続きました。

なお、溝口先生は平成24年10月１日より北陸先端科学技術大学院大学・知識科学研究科・サービスサイエンス研究センターの教授にご着任され、更なる研究活動に邁進なされています。

（古崎晃司（電子・博平14）、來村徳信（現教員）記）

河﨑善一郎教授　最終講義

電気電子情報工学専攻情報通信工学部門教授・河﨑善一郎先生は、平成25年３月31日をもって大阪大学を退職されることとなりました。ご退職にあたり、平成25年２月１日（金）午後３時より、大阪大学吹田キャンパス　電気系メモリアルホール（E1-115）にて、最終講義が行われました。当日は、工学研究科の教職員、学生はもとより、学外の多くのゆかりのある方々が聴講に来られ、最終講義が行われました。電気電子情報工学専攻長・伊瀬敏史教授のご司会のもと、河﨑先生ご入場に引き続いてご略歴の紹介が行われました。「私の卒業論文　－雷に魅せられて－」と題された講義では、大阪大学工学部通信工学科で工学博士の学位を取得された後、名古屋大学空電研究そして大阪大学に戻られてからの研究生活でお感じになられたこと、思われたこと等を、雷放電に関する研究を基軸に話されました。博士号を取得されて最初に職に就かれた名古屋大学空電研究所で、電磁雑音から雷放電の研究へシフトされたきっかけを話され、そして観測の重要さを認識されて雷放電研究に傾倒されていく様を聞くことができました。その中で、「理学者は工学者よりも工学的である」、「データ解析して、議論の相手がいなければ猫とでも議論せよ」等の独自の人生観をお話になられました。その後、ノルウェーに始まり、オーストラリアダーウィンを中心として、10カ国以上にわたった海外での観測に触れられ、最後に今後の活動についてお話になられて講義を終えられました。お話の後、先生のご希望により、ご質問を受けられ、先生のご活躍に感謝の意を込めて、事務員の西谷由子さんから花束が贈呈されました。その後、ラシェーナにおいて、ゆかりの方々との懇談会が開催され、賑やかなご歓談が続きました。

（牛尾知雄（電気・平５）記）

村上孝三教授　最終講義

情報科学研究科情報ネットワーク学専攻／工学部情報システム工学クラス教授・村上孝三先生は、平成25年３月31日をもって定年退職されることとなりました。ご退職にあたり、平成25年３月１日（金）午後３時30分より、情報科学研究科B101講義室にて、最終講義が行われました。当日は、情報科学研究科や工学部電子情報工学科など学内の教職員、学生はもとより、学外からも多くのゆかりのある方々が聴講に来られ、110名を超える盛況の中、講義が行われました。

専攻長の東野輝夫教授（情報ネットワーク学専攻）司会のもと、講義に先立って、村上先生のご略歴が紹介されました。

「次世代ネットワークを目指して」と題された講義では、村上先生のこれまでの研究歴の中で取り組んでこられた、その時々での「次世代」のネットワークが紹介されました。

まずは、富士通研究所御在籍時の研究について、電話通信時代の次世代ネットワークとして、ディジタルネットワーク、マルチメディア・ブロードバンドネットワーク、インテリジェントネットワークが取り上げられ、地上最大のシステムと言われたデジタル交換機の実用化や、世界初のATM交換機の開発に関する秘話が紹介され、所属組織及び国の内外を問わない研究交流の重要性を述べられました。

大阪大学に移られてからの研究については、インターネット時代の次世代ネットワークとして、新たなパラダイムの必要性を説き、品質保証・高信頼性・自律分散協調動作・可視化などをキーワードとする次世代（新世代）ネットワークについて話されました。

講義終了後、先生の御活躍に感謝の意を込め事務補佐員の佃真理子さんから花束が贈呈され、会場からの大きな拍手の中、先生はご退席されました。また、そ

の後別室で開催された懇談会では、多くの方々に囲まれ、賑やかな歓談が続きました。

（木下和彦（情報・平８）記）

世界最高性能
「フェーズドアレイ気象レーダ」を開発
～ゲリラ豪雨や竜巻の詳細な３次元構造をわずか10秒で観測可能に～

大阪大学電気電子情報工学専攻情報通信工学部門環境電磁工学領域では、情報通信研究機構（NICT）、東芝と共同で、ゲリラ豪雨や竜巻などを観測するための「フェーズドアレイ気象レーダ」の開発に成功し、大阪大学吹田キャンパス電気系E3棟にて観測を開始しました。本レーダは、10秒間隔で隙間のない３次元降水分布を100ｍの分解能で観測することが可能で、将来的には突発的気象災害の監視や短時間予測に役立つことが期待されています。

都賀川水難事故として知られる2008年７月28日に兵庫県神戸市灘区の都賀川で発生した悲劇的な水難事故をご記憶でしょうか？この事故は、神戸市に突発的、局所的な集中豪雨が発生し、水遊びなどで都賀川や河川敷にいた16人が急激な水位上昇により流され、小学生２人、保育園児１人を含む５人が死亡した事故です。あるいは、本年５月６日に茨城県つくば市で発生した竜巻事故も記憶に新しいと思います。近年、ゲリラ豪雨として知られる、このような突発的かつ局所的に甚大な被害をもたらす豪雨あるいは竜巻のような大気現象が、実は増加傾向にあります。これは、急速な都市化や地球温暖化の影響と言われていますが、本当のところはわかっていません。では、このようなゲリラ豪雨や竜巻の被害を軽減するには、どうしたら良いのでしょうか？

こうした現象を計測する最も有効な手段は、電磁波を用いたリモートセンシング技術であり、レーダ技術として知られています。この手段の利点は、何十kmという広範囲な領域に分布している降雨の構造を瞬時に把握できるところにあります。このため、国土交通省や気象庁等は日本全土を覆うようにレーダ観測網を整備し、我々もWeb等で降雨の分布状況を知ることができます。このような用途に用いられる現在のレーダは、パラボラタイプのアンテナが用いられ、ペンシルビームと呼ばれる１度前後の細いビーム幅内の領域を、方位角方向に360度回転しながら、仰角を徐々に上げて観測していく機械的な走査方法が用いられています。しかし、この方法では、地上付近の走査のみでは１分から５分程度、３次元立体観測には、５分から10分以上必要となっていました。これに対して、前述の局地的豪雨をもたらす積乱雲は、10分程度で急速に発達し、竜巻もわずか数分で発生し移動するため、これまでのレーダ方式では、こうした現象をスナップショット的に捉えることはできても、その発生から発達そして消滅までを逐次、観測することは不可能でした。これが、これらの大気現象の生成メカニズムの解明、予兆現象の発掘、迅速な警報、予知を阻む大きな要因でした。

このような状況に対して、我々大阪大学と東芝、情報通信研究機構のグループは、フェーズドアレイ方式という機械的なアンテナ走査ではなく、電子的・ソフトウェア的な走査方法を用いることによって、観測時間を大幅に短縮、10秒から30秒という飛躍的に短時間で詳細に、降雨の３次元立体を可能とする、Xバンドフェーズドアレイドップラーレーダを開発することに成功しました。

今回開発を行ったレーダは、128本のアンテナ素子をアレイ状に配列し、その内24素子を用いて、10度前後の比較的広い送信ビームを、仰角方向に地表面付近の０度から天頂方向の90度近くまで、10回程度電子的に切り替えて送信します。さらに、受信信号を128素子全て受信後、デジタル変換処理を行い、ソフトウェア上で合成処理を行って、約１度の受信ビーム幅を得ます。そして、方位角方向には機械的に回転させることで、半径約15kmから60km、高度15kmまでの範囲における隙間のない詳細な３次元降水分布を、10秒から30秒で観測することが可能となりました。

昨年の５月に吹田キャンパスの電気系E3棟屋上に設置を行い、６月頃より試験観測を開始しました。観測例のビデオを紹介出来ないのが残念ですが、降雨構

造が変化しながら、地表面に達する様子がアニメーション等によってよく再現されています。本レーダにより得られる詳細な３次元観測データは、短時間に大雨をもたらす積乱雲のメカニズムを明らかにしていくことと思います。これは、基礎科学的に大きなブレークスルー、発見が、本レーダを用いてなされることを意味します。そして、気象予測の高精度化、また局所的・突発的な気象災害の前兆現象の検出や短時間予報（ナウキャスト）情報としても応用されていくことでしょう。大阪市や大阪府等の自治体との連携も視野に入ってきています。

昨年８月に報道機関向けの見学会を行いました。当日はほぼ主要な報道機関すべてからの参加を得ることが出来ました。また、見学会の最中に、レーダを撮影するためにヘリコプターが飛んできて、上空を旋回したのには驚きました。そしてNHKの「おはよう日本」をはじめとして、数多くのニュースで報道され、翌日の読売新聞では第一面に大きく取り上げて頂けました。

このレーダ開発の成功には、産官学の連携が背景としてあります。産の製作能力、官の調整能力、そして学の研究能力と知識は、お互いに補い合い、これほど効果的とは思いませんでした。東芝および情報通信研究機構とは、長年にわたって共同研究を行っており、そこで築かれた信頼関係も大きかったと実感しています。情報通信技術の環境計測応用、自然災害に強い安心安全な社会の実現に向けた技術応用は、実は余り進んでおらず、今後大きく伸びていく余地が多分に残されていると思います。今後も変わらぬご支援、ご鞭撻をお願いする次第です。最後になりますが、この機会を与えていただきました各位に感謝致します。

（牛尾知雄（電気・平５）記）

澪電会会費納入のお願い

陽春の候、会員各位には益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。日頃より本会の活動にご理解とご支援をいただき有難うございます。

さて，澪電会のすべての活動は会員の皆様からの会費によって賄われておりますが、近年の社会情勢において本会の財政は非常に厳しい状況にあります。本会の活動を継続し、より活発にするために、なにとぞ平成25年度会費（4,000円）の早期納入（できれば６月末日までに）にご協力いただきますようお願いいたします。特に新しい会員の皆様の納入率が低くなっておりますので、卒業して間もない方々も是非ご協力のほどよろしくお願いいたします。また、住所等の会員情報の変更がございましたら、速やかにご連絡いただきますようお願い申し上げます（澪電会ホームページからご連絡いただけます）。

会費の納入方法といたしましては、従来の「銀行口座からの自動振込（ゆうちょ銀行含む）」、「コンビニエンスストアでの支払い（本年度から振込用紙の宛先が委託業者 小野高速印刷㈱の「同窓会係」となっております）」に加え、平成24年からはインターネットからの「クレジットカードによる支払い」にも対応いたしましたので、ぜひご利用下さい（詳細は澪電会ホームページの「会費納入方法」をご覧下さい）。自動振込の銀行口座を変更ご希望の場合は、澪電会事務局までご一報くだされば、折り返し口座変更手続きに必要な預金口座振替依頼書をご送付いたします。

なお、大学学部卒業時から53年を経過した会員（平成25年度会費の場合、学部卒業が昭和35年以前の会員）の会費は免除になっておりますので、納入の必要はございません。また、未納の過年度会費はご請求申し上げないことになっております。皆様のご協力をお願いいたします。

教員紹介

工学研究科
電気電子工学部門
システム・制御工学講座
システムアナリシス領域

准教授　巽　　啓司

工学研究科、電気電子工学部門、システム・制御工学講座、システムアナリシス領域（谷野研究室）に所属しております准教授の巽啓司（たつみけいじ）と申します。1998年４月の着任以降、ニューラルネットワークやサポートベクトルマシンといったパターン識別のための機械学習や、遺伝的アルゴリズム、パーティクル・スウォーム最適化手法、カオス力学系などを用いた大域的最適化問題のメタヒューリスティック解法を研究しております。最近は、本質的に予測不可能なカオス的挙動の中で、人間が制御可能な一部の性質を有効に活用して最適化問題の求解に役立てる課題に取り組んでおります。私は、京都大学工学研究科数理工学専攻の出身で、その専攻が比較的小規模だったため、着任後はじめて澪電会の卒業祝賀・謝恩会に参加させていただいた折、長い歴史と幅広い人脈をもち、活発に運営されている大規模な同窓会組織が非常に新鮮でうらやましく感じたのを覚えております。その後も、澪電会の各行事に参加するたびに、産業界との親密な連携関係を目にしたり、基礎から応用まで電気系の幅広い分野でご活躍の皆様との交流などを通してさまざまな刺激を受けるとともに、新しい着想を得るよい機会となっております。今後も、機会がありましたら、皆様よりご意見や助言を頂戴したいと存じておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

量子電子デバイス工学部門
集積エレクトロニクス講座
生体システム・デバイス領域

准教授　林田　祐樹

量子電子デバイス工学部門の集積エレクトロニクス講座にて、八木哲也教授、奥野弘嗣助教と共に、生体システム・デバイス領域を担当しております、准教授の林田祐樹（はやしだゆうき）と申します。2011年４月に大阪大学の方に着任し、こちらの環境にも少し慣れて参りました。着任前は、九州工業大学情報工学部にて博士リサーチアソシエイト、カリフォルニア大学デイビス校Division of Biologyにてポストドクトラルフェロー、熊本大学大学院自然科学研究科にて准教授をつとめました。研究の専門分野は、電子・情報工学と生体工学の融合領域にあります。特に、生体神経の感覚情報処理に関して、電気的および光学的な計測手法を用いた生理学実験解析や、生物物理／生理学モデルを用いた計算機およびハードウェアシミュレーション、また、信号処理技術を使ったヒト脳活動の解析や、医用神経補綴への応用に向けた神経電極等のインターフェイス技術に関する研究を行っています。幸いにも研究室では、阪大着任後すぐに、研究好きの大学院生や学部学生に恵まれ、また担当している学部講義でも時々、的を射た質問をしてくれる活気のある学生諸君を相手にする事ができ、これまで充実した日々を過ごしております。私、2013年は、電気系懇和会の主任幹事の役を拝命致しました。皆様にも大変お世話になるかと存じますが、ご後援を賜れば深甚に存じます。最後になりますが、昨今の不安定な国内外情勢のなか、大学が未来のために果たすべき役割は非常に大きいと考えます。是非とも、長い歴史と幅広い人脈を持つ澪電会の諸先輩から御指導、御鞭撻を頂戴致したく、お願い申し上げます。

退職された先生方の近況

森田　清三（大阪大学・産業科学研究所・特任教授）

定年退職して、ほぼ１年、やっと新しい生活に慣れてきました。現在は、公益社団法人日本表面科学会会長や公益財団法人新世代研究所副理事長をしながら、阪大産研の特任教授として働いています。日本表面科学会は、2011年５月の総会で会長に選出され、12月に公益化して、2013年５月の総会までの２年間の任期です。現在は、公益化した学会の次代を考えた将来計画を検討中です。新世代研究所は、2012年４月に公益化して、同時に副理事長になりました。企業などからの寄付で運営している財団法人の例に漏れず不景気の波をもろに受けて、財団法人の運営に苦労しています。不景気の影響で３年間中止していた研究助成ですが、公益化に合わせて研究助成を2012年度から再開しました。規模的には、最盛期の数分の一ですが、次世代ナノサイエンスの研究推進を目指しています。阪大産研の特任教授は週三日の非常勤ですが、2010年度から開始した科研費基盤研究（S）が2014年度まで続くので、博士研究員や共同研究者と議論しながら研究を進めています。また、めぐりあわせで、自宅の有るマンションの管理組合理事長を2013年１月末まで勤めています。このように、阪大・電気系の教授を定年退職しましたが、この１年間は、移行期のような状態です。

1998年に私が音頭を取って阪大コンベンションセンターで第１回目をスタートしたNon-contact Atomic Force Microscopy（NC-AFM）国際会議は、日本、ヨーロッパ、アメリカ持ち回りで毎年開催されて、2012年のチェコの国際会議で15回目となりました。この機会に国際諮問委員を辞任したのですが、辞任に際して国際諮問委員会からHonorary Awardを頂き、会議中に授賞式もして頂きました。2013年以降は、アメリカ（2013年）、筑波（2014年）、フランス（候補）（2015年）、イギリス（候補）（2016年）と続く予定です。このNon-contact Atomic Force Microscopy分野が私のライフワークになったと思います。

今年は、６月にMarseille/Provence, Franceのthe CINaM instituteでの招待講演、９月に韓国SuwonのPark Systems Corp.での招待講演、９月にパシフィコ横浜で開催されたInternational Union of Materials Research Societies, International Conference on Electronic Materials（IUMRS-ICEM 2012）での招待講演、10月にIslamabad, Pakistanで開催されたthe 6th Vacuum and Surface Sciences Conference of Asia and Australia（VASSCAA-6）での招待講演などの国内外の招待講演・依頼講演が有りました。

阪大物理で博士を取得してから、東北大電気通信研究所で13年、岩手大電子で１年半、広島大物理で６年半、阪大電気系で16年と、37年間教育と研究に携わってきました。最後となった阪大電気系での16年間の研究で、良き仲間に出会えて、ライフワークを確立できた事に感謝するとともに、今後、大阪大学の電気系がますます発展していくことを祈念しています。

卒業生の近況

斉藤　朋也（電子・平９、電磁M平11）

私は14年前に谷口研究室を卒業し、教授の紹介により、アメリカの半導体のスタートアップカンパニー（Halo LSI Inc.：NY州の元IBMの日本人エンジニアが設立）に就職し、Flashメモリデバイスの研究開発に従事しました。アメリカで６年間ほど日本・アメリカ・台湾の企業と共同開発プロジェクトを進めていました。７年ほど前に当時共同開発を行っていたNECエレクトロニクス（現在ルネサスエレクトロニクス）に移り、前職の技術を用いた車載マイコン向け混載Flashメモリの製品化に携わってきました。今日の車の省燃費や安全性には半導体の寄与が大きく、信頼性の要求が高い車載マイコンはルネサスエレクトロニクスの中心的事業の一つになっています。今まで続けてきた技術が世の中で利用されることは、エンジニアとして非常にうれしく思います。

私は大学院のころから、学会などで海外に行く機会に恵まれ、「日本とは何か違うなぁ？」と海外に興味を持ち、アメリカで経験してみたいと思うようになりました。アメリカでの一つのエピソードとして、当時、日本でもアメリカでも車のリコールの問題があり、私の車もリコール対象になり、ディーラーに持って行ったことがありました。もし、日本ならディーラーの方が平あやまりのところを、アメリカでは、「すべて新品部品に交換してあげますよ。しかも無料で、良かったですね！」とお得感を強調されました。同じ事象でもまったくとらえ方が異なることに驚きました。

仕事では、一貫して同じFlashメモリデバイスの開発業務を行ってきましたが、アメリカと日本、小規模企業と大企業で、まったく異なる環境を経験してきました。アメリカの会社では、若いエンジニアが中心で、試行錯誤も多かったですが、少人数であるために、自分の守備範囲が広く、仕事を任せてもらえる環境でした。同時に、少人数ではできる限界があるとも感じていました。

一方、日本の大企業では、人が多く周りのサポートが厚く、組織戦で製品化を達成するための環境が整っている中で仕事ができました。しかし、開発業務が他部署にまで多岐にわたるため、自分の領域が狭く、全体として自分のポジションを把握しにくいと感じることもありました。

最後に、私の海外経験から、関西人の社交性の高さは、世界に通用すると感じています。私は人と話をすることが好きで、海外では上下関係なく情報が交換できたと思います。その中で、価値観は違うことが正常な状態で、議論をすることで、お互いを認め合う事を学んだと思います。現在のルネサスエレクトロニクスでは、日立、三菱、NECの多様な価値観・企業文化が混ざり合い、ある意味では正常な状態かもしれません。産業再生機構からの出資も受け、今後も世の中に役に立つ製品が生み出せる企業とし存続するために、今までの私の経験を少しでも役立てて、今後も業務に取り組んでいきたいと思います。

（ルネサスエレクトロニクス㈱MCUデバイス開発部）

久保　成毅（電子・B平10、M平12）

ご無沙汰しております。平成12年　溝口研究室（産業科学研究所　知識システム研究分野）で修士課程を終えた久保です。このたび、近況報告の機会をいただきましたので、寄稿させていただきます。

私は平成12年（2000年）にNTT西日本に入社しました。当時はインターネットが急速に普及した時期です。私の研究テーマは「『知識』をどう整理するか。それをどのようにコンピュータ（人工知能）に理解させ、活用するか（オントロジ工学）」という内容だったのですが、インターネットが『知の集積場所』としての可能性を見せ始めており、「インターネットを使って、何か、世の中を変えたい。だったら最も規模が大きいところに行こう」と志したことが、NTTへの入社動機でした。同時に、コンサルティングや組織マネジメントにも興味があり、NTTという巨大組織自体にも魅力を感じての入社でした。ちなみに、入社の前年（平成11年）７月にNTTは東・西・コミュニケーションズ・研究所（持株）に分割されており、「NTT西日本」としては第１期入社となりました。「NTTが分割される」と分かった上で、NTTを選択した世代であり、同期は個性派ぞろいです。今でも互いに刺激し合う仲が続いています。

私は「技術系」として入社したはずですが、入社以降、「技術系ど真ん中の仕事」をせずに10年以上を過ごしま

した。最初の５年はコンサルティング営業で大規模な金融系のお客様を担当しました。全国2,000拠点を結ぶVoIPネットワークの構築案件などを手がけましたが、設計・構築はSEメンバが担当し、私は前段のコンサルティングやコーディネートを担当していました。理系の素養は活用しつつも、純粋な技術職ではありませんでした。

次の２年は、みなさんもお使いかもしれませんが、「ひかり電話」のマーケティングを担当しました。「ひかり電話」は平成17年にサービスを開始し、最初の２年間で一気に200万世帯のお客様に提供させていただくまでに拡大したのですが、その際の私の役割は、開発部門や通信設備の構築・運用部門と各支店の販売部門との橋渡し役といった仕事でした。前職同様、理系の素養は活用しつつも、いわゆる技術職とはちょっと違う仕事でした。

翌年には、NTT西日本が力を入れている「地域・地方の活性化」のため、各地域の中小企業様向けの営業力を強化するべく「オフィス営業部」を起ち上げたのですが、その際の企画メンバとして１年間参画しました。さらにその後の３年間は人事・育成を担当しておりました。「技術系人材をどのように採用し、育成し、配置するか」という仕事でした。このようなキャリアを歩むなか、入社以降、リクルータ（NTT西日本では『キャンパス・コミュニケータ』と呼び、若手・中堅社員の大事な役割のひとつです）として、また採用担当として、大阪大学との縁は切れることがなく、毎年溝口研究室や就職担当教授の先生方のところに伺わせていただきました。ありがとうございました。

一昨年（平成23年）、私にとっては少し大きな転機を迎えました。生まれてこの方、ずっと関西（神戸・大阪）で過ごしてきたのですが、その馴染みの地に家族を残し、『NTTホームテクノ』というグループ会社（社内カンパニに近い組織）の広島サービスセンタに着任しました。キャリア的にも、初めて本社を離れ、「現場」での仕事となりました。前職までの11年間、直属の部下というものを持ったことが無かったのですが、いきなり70名を超える部下を持つことになり、試行錯誤の連続です。業務内容はというと、NTT西日本が進める『街デジ・家デジ』ビジネスを現場で実行する、というミッションを担っています。

NTT西日本では、光IPネットワークの全面展開の目処が見えてきたことから、平成16年ごろより『街デジ・家デジ』というコンセプトで事業の進化を図っています。『街デジ・家デジ』とは、高速高品質な光IPネットワークをベースに、家庭、事務所からコンビニ、カフェ、さらには商店街全体、ショッピングモール全体、ゆくゆくは街全体にモバイル・アクセス・ポイント（現在はWi-Fiベース）を張り巡らせ、様々な情報端末（携帯電話、タブレット、情報家電、各種センサ等々）をシームレスに接続し、快適な個人向け、ビジネス向けO2Oサービスを展開しようというものです。例えば関西では『西宮ガーデンズ』で昨年（平成24年）から実証実験を開始しました。九州では『スマートひかりタウン熊本』というプロジェクトがスタートしました。私の担当する広島でも市内最大の『広島本通商店街』全体を無線アクセス・ポイントで覆いました。ご興味のある方は『goo』などで検索いただければ幸いです。

このような『街デジ・家デジ』を実際に皆様に「当たり前のように」お使いいただくためには、①街中に張り巡らす通信ネットワーク（WiFiなどの無線を含む）の構築・運用、②（若者だけでなく）様々な世代のお客様、（先進企業だけでなく）様々な業種／規模の法人のお客様が、多種多様な情報端末やITシステムをストレス無く活用できること、が必要となります。NTTホームテクノは、このような街全体のネットワークの構築・運用に加え、様々なお客様が当たり前に『街デジ・家デジ』をご利用いただくための、技術的サポートやご利用方法のご提案などをさせていただく部隊で、もともとNTT西日本の中にあった設備構築・運用部門を独立させた会社です。私は主に広島市内圏を担当し、日々の業務から、そのために必要な技術プロフェッショナル人材の育成までを担っています。この『街デジ・家デジ』の現場では、刻々と「新しいこと」が産まれ、大変ですが、刺激的で非常に楽しい毎日を過ごしています。

NTT西日本グループおよびNTTグループの使命は、単なる利益追求ではなく、街全体・社会全体を活性化させ、個々のお客様のライフスタイルそのもの、様々な企業のビジネスプロセスそのものを革新していくことにあります。私自身も、NTTの営みを通して、入社当初の「世の中を変えたい。」という想いを実現していきますので、産学官にわたり活躍しておられます同窓の皆様、今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

（西日本電信電話㈱／㈱NTTホームテクノ）

林　　祐輔（電気・B平11、M平13、D平16）

私は、2004年３月に博士後期課程を修了した後、2004年４月から５年間にわたり産業技術総合研究所のパワーエ

レクトロニクス研究センターに勤務し、2009年４月から現在に至るまで株式会社NTTファシリティーズの研究開発本部に勤務しています。

博士課程を修了してから９年間、主にパワーエレクトロニクス技術を用いた電気エネルギーの有効利用に関する研究開発に従事してきました。大阪大学ではパワーエレクトロニクスの基礎と電力変換技術を学び、無停電電源装置や太陽光発電用パワーコンディショナなどの電力変換器を用いた実験を通じてその機能と適用効果を肌で知ることができました。産業技術総合研究所では、SiC（Silicon Carbide）やGaN（Gallium Nitride）など当時研究開発段階であった超低損失半導体パワーデバイスの電力変換回路応用に携わり、電力変換器を構成する材料に関する見識を深めると共に、構成材料の性能向上による電力変換器の更なる小型化・高効率化の可能性を検討してきました。NTTファシリティーズでは、情報通信機器に適した直流給電方式の開発に携わり、応用側の視点から小型・高効率な電力変換器の適用効果を検証するとともに、将来の給電方式の在り方について議論しています。

就職活動中の縁で産業技術総合研究所にポストドクターで採用され、産業技術総合研究所とNTTファシリティーズとの共同研究がきっかけで転職することになりました。お世話になった方々との縁があっての現在はもちろんのこと、将来の目指す姿や目標を見定め、目標を達成するための課題を考えた末の選択も少なからずあったように思います。近年、環境問題や省エネルギー化の観点から電気エネルギーの有効利用に対する関心が高まっていますが、パワーエレクトロニクス技術はこのような関心に対して有効な解を提供できると考えています。今までの経験を活かしながら、一工学研究者として技術で社会に貢献していきたいと思います。

（NTTファシリティーズ）

松村　友哉（情報科学研究科・D平20）

私は2008年３月に情報システム工学専攻（尾上研究室）の博士後期課程を修了し、伊仏合弁の半導体メーカであるSTマイクロエレクトロニクスへ、マーケティング・エンジニアとして就職いたしました。

学生時代には、産学連携ベンチャー企業である株式会社シンセシスでの仕事や、社会人ドクターの先輩方のご指導のもとで研究をさせて頂いたこともあってか、様々な研究成果の実用性に興味が沸いてきました。また、国際的な環境で通用するようなスキルを身につけたいと考え、英語を使わないと仕事にならないような環境で、技術と顧客の橋渡しであるマーケティング・エンジニアとしてキャリアをスタートしました。約４年半、車載用半導体のマーケティングの仕事をさせて頂いた中で、「技術力」はもちろん大きな要素ですが、それだけで製品が売れるワケではないというビジネスの厳しさと面白さを肌で感じました。また、イタリア人やフランス人と日本のお客様との間に入って仕事を行ってきたことで、瞬発的な状況理解や国際的な交渉力が鍛えられたと思います。

2012年12月には、より幅広い知見と、海外駐在も含めた国際的な環境を求めて、ドイツの自動車部品メーカであるベーア・ジャパンへ転職し、日本の自動車メーカへの開発業務を行っております。現在扱っている製品は、熱交換器系の部品であり、伝熱工学・熱力学・流体力学・材料工学・金属加工などがベースとなっており、電気系とはまた違った世界のため、勉強勉強の毎日です。

このように現在は、学生時代とは少し異なった分野へ進んでおりますが、大学院の研究生活で培った論理的思考や技術的理解力は、これまで大きな武器として役に立っていると確信していますし、様々な分野へ適応できると感じています。これからも幅広い分野にチャレンジしていきたいと思っています。

（STマイクロエレクトロニクス）

学生の声

井渕　貴章（電気電子情報工学専攻　システム・制御・電力工学コース・Ｄ１）

私は現在、電気電子情報工学専攻の博士後期課程の学生として舟木研究室に在籍し、省エネルギー化に欠かせない電力変換回路の最適設計に向け、インダクタ等の受動素子の特性解析・評価や回路の高速・高周波数動作化に伴って懸念される電磁妨害ノイズの発生メカニズムの解明に関する検討を中心に取り組んでいます。

さて、私自身は2007年４月に大阪大学へ入学してちょうど６年、そして研究室生活も３年半が経とうとしています。学部３回生まではサイクリング部に所属し、特に長期休みには全国各地を自転車で走るなど、わりと自由な大学生活を送っていたように思います。その分、研究室に配属となって間もないころは研究を中心とした生活になじむのが大変で、回路計算、実験、プレゼン発表から体調管理に至るまで、ありとあらゆる出来事に四苦八苦したのをよく覚えています。ただ、自分の取り組むべき研究テーマ、課題について様々な角度から主体的に考え、必要な知識や技術は自ら習得しながら結果を出していくという一連のプロセスは、やればやるほど面白いなと感じるようになりました。また国内学会や国際会議での発表を通して、確かな手応えと自分自身をさらに高めていきたいと思うようにもなりました。もちろん最初から１人で全部出来るわけもなく、舟木先生や研究室の諸先輩方をはじめ、皆さんにお世話になってきたからこそ研究活動を進めることができたのであり、本当に感謝しています。

ずばぬけてよい成績を修めていたわけでもないこの私が、まさか博士後期課程まで進学することになるとは、入学時には考えもつきませんでした。日ごろお世話になっている方々へ感謝の気持ちを忘れずに、これからも幅広い視野を持って積極的に研究・勉学に精進していきたいと考えています。

井上　文彰（電気電子情報工学専攻　情報通信工学コース・Ｍ２）

私が大阪大学に入学してから、もうすぐ６年が経ちます。サークル活動に打ち込んだこと、色々なアルバイトをしたこと、面白い講義にわくわくしていたことなど様々な思い出がありますが、特に研究室配属は私にとって大きな転機となりました。私は、早期特別配属制度によって学部３年次に滝根研究室へ配属され、それと同時に通信トラヒック理論（待ち行列理論）に関する研究を開始しました。その後、最初の２年間を終えた時点で私はすっかり研究の面白さに取り憑かれてしまい、博士前期課程への入学時には、既に博士後期課程へ引き続き進学することを決意していました。これは、研究室に配属される前は予想すらしなかったことで、私にとっては一大決心となりました。

それから始まった博士前期課程は、充実した２年間となりました。設備の整った研究室はとても居心地が良く、また、先生方には大変丁寧にご指導をしていただくなど、非常に恵まれた環境で過ごすことができました。特に研究活動においては、定期的に国内の学会で発表できるよう着実に成果を上げ、国際会議での発表を行い、それと並行して学術論文誌へ投稿する論文を作成するといった一連の活動を何とかこなしてくることができました。まだまだ物足りなくはありますが、それらを通じて、研究者としての能力が少しずつ身に付いてきたように感じます。

私の研究テーマは、通信網において生じる輻輳のモデル化に用いられる、待ち行列モデルと呼ばれる数理モデルの解析手法に関するものです。待ち行列モデルは、多数の利用者が限られた共有の資源に対し確率的に利用要求を発生させる状況を記述する数理モデルであり、通信網における輻輳に限らず、スーパーのレジや銀行のATM、病院の待合室など、混雑が生じる状況を表現するのに広く用いられます。私の研究では特に、利用要求の発生がバースト的であり、かつ、動画、音声、テキスト、制御情報など性質の異なるパケット流が同一の通信網上で伝送されるという近年のパケット交換網の特徴を表現可能な枠組みを取り扱い、それに対して適用可能な解析手法を考察しています。このようなモデルの挙動は一見複雑ですが、モデルのもつ構造に注目した適切な観察を行うことによって、その統計的な振る舞いを正確に把握することができます。初めは複雑に見えていたモデルが、ふとした思い付きをきっかけに、とても単純なものとして捉えられるようになることが、この研究の大きな魅力だと私は考えています。

来年度より博士後期課程へ進学することで、さらに沢山の興味深い事柄に向き合うことができ、また、自身の能力を高めていくことができると期待しています。博士後期課程修了時にも、充実した学生生活であったと振り返ることができるよう、今後も努力を重ねていきたいと思います。

岡田　雅司（情報システム工学専攻　情報システム構成学講座）

私は石川工業高等専門学校（高専）を卒業後、大阪大学へ３年次編入学し、情報システム構成学講座（尾上研究室）での研究生活を経て、この度、博士後期課程を無事修了する運びとなりました。編入先として本学を選択した理由は「記念に受験してみたら合格してしまった」という要領を得ないものでありましたが、計７年大阪で過ごし、来春からも大阪の企業で働くことになったのは何かしら運命づけられていたことのようにも思えます。さて、本誌に寄稿する貴重な機会を頂きましたので、学生生活で印象に残っていることを思いつくままに振り返ってみた

いと思います。しがない一学生の記録ではございますが、ご一読いただければ幸いでございます。

編入学一年目。さしあたっての不安は「講義が理解できるのか」ということでした。しかしながら、いざ蓋を開けてみますと、大半の講義の内容は高専で学んだことの復習もしくはその発展であり、十二分についていくことが出来ました。専門知識の下地を作って下さった母校の石川高専の先生方には頭の下がる思いであります。

二年目、研究室配属。立体音響技術の研究チームに配属され、指導教員や博士後期課程の先輩からの熱意ある指導の下、卒業研究に取り組みました。研究室の指導教員、先輩、同期の学生は優秀かつ個性的な人ばかりであり、非常に刺激を受けたことをよく覚えています。「これが大阪大学の実力か」と改めて実感いたしました。

三～四年目、博士前期課程。所属していた研究チームの教員・先輩方が全員、退職・卒業してしまい、修士一年の身でありながらチームを牽引する立場になりました。その後しばらくは、暗中模索、試行錯誤、右往左往の様相であり、思ったような研究成果が出せず、苦しい時期が続きました。今思えば、この時の苦い経験は、自身の研究遂行能力を大きく成長させる上で重要な要素でありました。

五～七年目、博士後期課程。音のシミュレーションに興味を持ち、研究範囲を拡大しました。その研究成果は著名な論文誌にて発表することができ、さらに、IEEE関西支部から学生研究奨励賞を頂きました。また、リサーチアシスタントとして新しい無線通信システムの試作に従事する機会を頂き、こちらの成果に関してはIEEE SPS JapanからBest Student Demonstration Awardを頂きました。これらの業績は、学生生活で身に着けた技術スキル、研究遂行能力、プレゼン能力等々の集大成であると同時に、多くの方のご指導、ご支援があってこそのものであります。この場を借りて、全ての関係者各位に深く御礼を述べさせて頂きます。

こうして振り返ると長い学生生活を送ってまいりました。決して大きくはありませんが、胸を張って修了できる程度の足跡は残せたと自己評価しております。来春からは企業に勤める立場でありますが、現状に満足せず、更なる精進を重ね、日本の産業界の更なる発展に寄与していきたいと思う所存でございます。

久木田健太郎（電気電子情報学専攻　量子電子デバイス工学コース・Ｄ２）

私は現在、電気電子情報工学専攻の集積機能デバイス領域（旧谷口研究室）に所属しております。元々修士課程までは同専攻、近藤研究室にて半導体レーザのプロセス技術に関わる研究に携わって来ましたが、学生の間にデバイスのプロセス技術とシミュレーション技術両方に携わり視野を拡げたいとの思いがあり、本研究室への移動を決めました。

集積機能デバイス領域では回路設計・デバイスシミュレータ開発を主な研究テーマとして取り扱っていますが、私はその中で微細半導体トランジスタ内部の熱輸送に関する研究に取り組んでいます。現在の様々な電子機器の機能を大きく左右するシリコントランジスタの将来型構造は熱が伝導しにくく温度が上昇しやすいため、いかに内部の熱を外に逃がすかが重要な課題となります。そのため私は熱輸送シミュレータを開発し、将来型トランジスタの放熱性を予測することを研究テーマとしています。熱輸送シミュレータ開発にあたっては、自身でソースコードの記述を行ったため、工学的応用の観点のみでなく、物理現象の深い理解が必要とされ、開発は難航を極めました。地道に文献を調査し、他大学の研究者と議論を繰り返し、様々なアルゴリズムの適用を行い試行錯誤し、ようやく良好な解析結果を得ることができるようになる度、私は研究に対して求められる人との繋がりや視野の広さを実感しました。本研究室所属後、様々な学会に参加する機会がありましたが、中でもサンフランシスコで開催された国際会議での発表は自身を大きく成長させる機会になりました。これは電子デバイス分野で最高峰の権威を持つとされる学会であったため研究テーマにインパクトが重視され、内容をいかに明瞭にかつ面白く伝えるかが重要でした。そのため、いかにインパクト性のあるテーマを選択し、わかりやすく他人にアウトプットするかに注力しました。試行錯誤を繰り返し、最高の舞台で発表を行った事は今後の自身の人生においてとても貴重で得がたい経験になったと思います。

貴重な経験を積む機会を多く与えてくださり、お世話になった先生方には感謝致します。この場をお借りして、厚く御礼の意を述べさせていただきます。私が研究室で身につけた知識が、実社会に出て役に立つ機会があるのかまだわかりませんが、少なくともここで学んだノウハウや方法論は確実なものだと実感しています。生産性の高い、人から求められる研究者になれるようこれからも精進し続けていきたいと思います。

会員の方々のご活躍

受賞（学会賞・学会フェロー称号等）

西　尾　章治郎　先生
　第２回立石賞功績賞
佐々木　孝　友　先生
　第37回井上春成賞
森　　勇　介　先生
　第44回市村学術賞功績賞
　日本結晶成長学会第29回論文賞受賞
河　﨑　善一郎　先生
牛　尾　知　雄　先生
　電気学会電気学術振興賞論文賞
滝　根　哲　哉　先生
松　田　崇　弘　先生
　電子情報通信学会　通信ソサイエティ
　Best Tutorial Paper Award
　電子情報通信学会　通信ソサイエティマガジン論文賞
阪　口　　啓　先生
　電子情報通信学会　通信ソサイエティ　論文賞
吉　村　政　志　先生
佐々木　孝　友　先生
森　勇　　介　先生
　第36回レーザー学会業績賞　進歩賞
辻　　毅一郎　先生
佐　伯　　修　先生
　エネルギー・資源学会　第一回学会賞
森　　勇　介　先生
吉　村　政　志　先生
　ドイツ・イノベーション・アワード
　「ゴットフリード・ワグネル賞2012奨励賞」
滝　根　哲　哉　先生
　第７回待ち行列理論とネットワーク応用国際会議（QTNA2012）Best Paper Award
西　尾　章治郎　先生
　Int'l Conf. P2P, Parallel, Grid, Cloud and Internet Computing, Best Paper Award
原　　隆　浩　先生
　Int'l Conf. P2P, Parallel, Grid, Cloud and Internet Computing, Best Paper Award
義　久　智　樹　先生
　Int'l Conf. P2P, Parallel, Grid, Cloud and Internet Computing, Best Paper Award
川　山　　巌　先生
　平成24年度大阪大学総長奨励賞

澪電会と大阪大学工業会について

澪電会事務局へのお問い合わせ事項で目立ちますのは、「終身会員であるのに会費の請求をしてきた」ということです。これは、大阪大学工業会と澪電会とを混同しておられるためと思われますので、工業会と澪電会との関係について簡単にご説明いたします。

大阪大学工学部（その前身校を含む）には、学部全体の同窓会「大阪大学工業会」と学科または系の同窓会（例えば電気系学科であれば「澪電会」）があります。従って、澪電会の会員のうちほとんど全ての方は同時に大阪大学工業会の会員なのです。すなわち、会員構成の面では澪電会は工業会の下部組織といえます。

ところが、工業会と澪電会とは財政的には全く独立しておりまして、それぞれが独自に会費制度を設けております。従いまして、工業会会費を既にお支払いになった方、あるいは工業会の終身会員の方からも、澪電会会費（年会費一律4,000円）を頂戴しております。また、澪電会では終身会員制は設けず、毎年会費をお納めいただいております。

会報や名簿の発行などを含め、澪電会の活動は全て会員各位からの会費に依存しております。澪電会の健全財政のため、今後とも会費納入につきましてよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

なお、勤務先、住所の変更などに関しましては工業会とは別途に、澪電会にもお知らせくださいますよう切にお願い申し上げます。

教室情報

平成25年度電気電子情報工学専攻役割分担

大学院専攻

電気電子情報工学専攻長	伊瀬　敏史	教授
電気電子システム工学部門長	上田　良夫	教授
情報通信工学部門長	滝根　哲哉	教授
量子電子デバイス工学部門長	伊藤　利道	教授
システム・制御・電力工学コース長	高井　重昌	教授
先進電磁エネルギー工学コース長	飯田　敏行	教授
情報通信工学コース長	北山　研一	教授
量子電子デバイス工学コース長	近藤　正彦	教授

電子情報工学科

電子情報工学科長	谷野　哲三	教授
電気電子工学科目長	森　　勇介	教授
システム制御電力コース長	高井　重昌	教授
先進電磁エネルギーコース長	飯田　敏行	教授
量子電子デバイスコース長	森　　勇介	教授
情報通信工学科目長	中前　幸治	教授
情報通信工学コース長	中前　幸治	教授

就職担当

電気系就職担当代表窓口	馬場口　登	教授
電気電子システム工学部門	高井　重昌	教授
情報通信工学部門	馬場口　登	教授
量子電子デバイス工学部門	片山　光浩	教授
電気電子工学科目		
システム制御電力工学コース	高井　重昌	教授
先進電磁エネルギーコース	高井　重昌	教授
量子電子デバイスコース	片山　光浩	教授
情報通信工学科目		
情報通信工学コース	馬場口　登	教授
情報システム工学クラス	前田　太郎	教授

電気系人事（平成24年４月２日～平成25年４月１日）

久保　　理	准教授	H24.12.1	採　用
川山　　巌	准教授	H24.12.1	昇　任
石川史太郎	助　教	H25.3.31	退　職（愛媛大学へ）
伊藤　義道	助　教	H25.3.31	退　職（大阪電気通信大学へ）
柿ヶ野浩明	講　師	H25.3.31	退　職（立命館大学へ）
溝口理一郎	教　授	H24.9.30	退　職
河﨑善一郎	教　授	H25.3.31	定年退職
村上　孝三	教　授	H25.3.31	定年退職

母校の教壇に立つ本会会員（平成24年度）

・電気電子工学科目「産業社会と工学倫理」
㈱富士通システム統合研究所　代表取締役社長
前川　　通（電気・昭49）

・電気電子情報工学専攻「電気電子情報工学特別講義Ⅰ」
JFEスチール㈱西日本製鉄所制御部制御技術室　主任部員（課長）
岡田　誠康（電子・平４）

・電気電子情報工学専攻「電気電子情報工学特別講義Ⅲ」
関西電力㈱経営改革・IT本部　通信システムグループ　チーフマネジャー
滝本　昭彦（通信・昭61）

・電気電子情報工学専攻「電気電子情報工学特別講義Ⅲ」
NTTドコモ㈱無線アクセス開発部　担当部長
安部田貞行（通信・平５）

・電気電子情報工学専攻「電気電子情報工学特別講義Ⅲ」
西日本電信電話株式会社　ネットワーク部ネットワーク設備部門　部門長
米田　秀弥（通信・昭62）

・電気電子情報工学専攻「プラズマフォトニクス」
ゼータフォトン株式会社　取締役
藤田　雅之（電気・昭58）

・電気電子工学科目「電力工学Ⅰ」
関西電力株式会社　火力事業本部　火力エンジニアリングセンター　基盤技術グループ　副長
近藤　憲司（電気・平９）

・電気電子情報工学専攻「電力・エネルギーシステム計画・運用論」
関西電力株式会社　電力流通事業本部　給電計画グループ　チーフマネジャー
多田　充宏（電気・平元）

・電気電子工学科目「ディジタル電子回路」
和歌山大学　システム工学部　教授
松本　正行（通信・昭57）

平成25年３月電気系卒業者・修了者就職先

■学部卒業生の進学・就職先（本会に関わる内部進学者を除く）

システム制御電力コース（２名）
未定（2）

先進電磁エネルギーコース（６名）
多田電機㈱
㈱ダイヘン
三井物産㈱
未定（3）

量子電子デバイスコース（10名）
NOK㈱
香川県
JFEスチール㈱
(独)宇宙航空研究開発機構
スズキ㈱
共英製鋼㈱
東京大学大学院
京都大学大学院（2）
未定

通信工学クラス（10名）
名古屋国税局
㈱野村総合研究所
エスペック㈱
㈱豊田自動織機
近畿日本鉄道㈱
東京大学大学院
京都大学大学院
未定（3）

情報システム工学科目（14名）
㈱野村総合研究所
近畿管区警察局
下関市役所
西日本旅客鉄道㈱
㈱アイピーエス
ニッセイ情報テクノロジー㈱
東京大学大学院
京都大学大学院
奈良先端科学技術大学院大学（4）
未定（2）

■大学院前期課程修了者

電気電子システム工学部門（45名）
東芝三菱電機産業システム㈱
エリクソン・ジャパン㈱
三菱電機㈱（2）
ヤンマー㈱
パナソニック㈱（3）
関西電力㈱（3）
東海旅客鉄道㈱
川崎重工業㈱（2）
㈱NTTファシリティーズ
日東電工㈱
西日本高速道路㈱
京阪電気鉄道㈱
㈱東芝（2）
Jomo Kenyatta University of Agriculture and Technology（JKUAT）
㈱クボタ
トヨタ自動車㈱
西日本高速道路ファシリティーズ㈱
㈱島津製作所
グローリー㈱
ボッシュ㈱
三菱重工業㈱
ロート製薬㈱
南海電気鉄道㈱
フジテック㈱
エルメスジャポン㈱
古野電気㈱
コニカミノルタ㈱
九州電力㈱
中国電力㈱
㈱IHI
富士通㈱
旭化成㈱
北陸電力㈱
西日本電信電話㈱
大阪大学大学院
未定（3）

情報通信工学部門（34名）
東日本電信電話㈱（2）
パナソニック㈱（3）
帝人㈱
住友電気工業㈱（2）
㈱エヌ・ティ・ティ・ドコモ
日本ナショナルインスツルメンツ㈱
エリクソン・ジャパン㈱
関西電力㈱
日本電気㈱
日本電信電話㈱
㈱ケイ・オプティコム（2）
アクセンチュア㈱
九州旅客鉄道㈱
リコーテクノシステムズ㈱
アイテック阪急阪神㈱
㈱インターネットイニシアティブ
四国電力㈱
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ㈱
三菱電機㈱（2）
㈱デンソー
トヨタ自動車㈱
西日本電信電話㈱

㈱日立ビルシステム
九州電力㈱
㈱エヌ・ティ・ティ・データ
大阪大学大学院（3）

量子電子デバイス工学部門（67名）
オムロン㈱（2）
富士通㈱
キヤノン㈱（3）
㈱東芝（3）
岐阜県
新日鉄住金㈱
豊中市
広島県
日立オートモティブシステムズ㈱
パナソニック㈱（7）
三菱電機㈱（3）
ローム㈱
住友電気工業㈱
京セラドキュメントソリューションズ㈱
㈱沖データ
㈱ナックイメージテクノロジー
東京エレクトロン㈱
日立建機㈱
三菱重工業㈱
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ㈱
東日本電信電話㈱
関西電力㈱（2）
ソニー㈱（4）
㈱キーエンス
㈱日立製作所
竹中工務店㈱
富士電機㈱
三菱電機㈱
㈱島津製作所
住友電気工業㈱
㈱メイテック
パイオニア㈱
㈱クボタ
㈱豊田自動織機（2）
㈱日立ハイテクノロジーズ
㈱エヌ・ティ・ティ・ドコモ
ナノフォトン㈱
出光興産㈱
東京ガス㈱（2）
トヨタ自動車㈱
KDDI㈱
防衛省
シャープ㈱
ファナック㈱
日揮㈱
大阪大学大学院（2）
未定

■大学院後期課程修了者

電気電子システム工学部門（5名）
三菱電機㈱
㈱デンソー
トヨタテクニカルデベロップメント㈱
経済産業省
大阪大学

情報通信工学部門（4名）
㈱日立製作所
日本アイ・ビー・エム㈱
日本電気㈱
大阪大学

量子電子デバイス工学部門（7名）
日東電工㈱
パナソニック㈱
ポリプラスチックス㈱
サンディスク㈱
京都大学
電気通信大学
未定

注意：会社名等の後ろのカッコ内数字は人数（数字のないものは一人）を表します。調査時（平成25年3月末まで）に回答の得られたものを（順不同で）記載しました。

澪電会役員

［本部］

会　長

吉野　勝美（電39）	島根県産業技術センター

副会長

藤野　隆雄（通46）	㈱ケイ・オプティコム
鶴保　征城（子39）	学校法人・専門学校HAL東京
金藤　敬一（電46）	九州工業大学
白髭　修一（電46修）	中国電力㈱
木下　健治（子49修）	富山工業高等専門学校
坂入　修二（電47修）	四電エンジニアリング㈱
片山　正昭（通56）	名古屋大学
北山　研一（通49）	阪大・工・電電情・通

幹　事

大森　　裕（電47）	阪大・工・電電情・子
田中　和浩（電49）	㈱ダイヘン
藤田　尚徳（電49）	阪大・レーザー
中前　幸治（子52）	阪大・情報科学研究科
山元　正人（電53）	日本電気㈱
庄中　　永（通54）	オムロン㈱
馬場口　登（通54）	阪大・工・電電情・通
中井　光男（電55）	阪大・レーザー
田中　史朗（電56）	㈱東芝
岸元　泰親（子57）	シャープ㈱
小早川和徳（子58）	住友電工システムソリューション㈱
魚田　利浩（電58）	シャープ㈱
浦部　嘉夫（通59）	パナソニック㈱
兒玉　了祐（電60）	阪大・工・電電情・気
藤田　卓志（子61）	㈱富士通研究所
木村　秀夫（電62）	西日本旅客鉄道株式会社
楠本　　修（子63）	パナソニック㈱
鹿井　正博（子63）	三菱電機㈱
市原　賢一（電平元）	関西電力㈱
西口　芳明（電平元）	三菱電機㈱
荒木　　正（通平元）	住友電工ネットワークス㈱
松田　洋一（通平２）	NTTスマートコネクト㈱
山田　佳弘（通平２）	日立コンシューマエレクトロニクス㈱
鎌倉　良成（子平４）	阪大・工・電電情・子
松田　崇弘（通平８）	阪大・工・電電情・通
宮川　修一（子平８）	阪神電気鉄道㈱
白石　偉久（子修平８）	三洋電機㈱
服部　　聡（通平８）	関西電力㈱
南浦　武史（電平９）	三洋電機㈱
橋本　昌宜（現教員）	阪大・情報科学研究科
三浦　友史（現教員）	阪大・工・電電情・子

阪大・工・電電情・気：	大阪大学	大学院工学研究科	電気電子情報工学専攻	電気電子システム工学部門
阪大・工・電電情・通：	〃	〃	〃	情報通信工学部門
阪大・工・電電情・子：	〃	〃	〃	量子電子デバイス工学部門
阪大・情報科学研究科：	〃	大学院情報科学研究科		
阪大・レーザー　　：	〃	レーザーエネルギー学研究センター		

同窓会だより

通信昭和27年卒60周年記念クラス会

日　時：平成24年４月17日（火）～18日（水）
場　所：浜松市　グランド　エクシブ　浜名湖
出席者：（写真左から）
林　昇、毛利悦造、道田秀男、西山　昌、
岸川重蔵、山下一美、岩橋照夫、仲瀬一彦、
森　直一

平成24年（昭和87年）は昭和27年卒業の我々にとっては、卒業60周年になります。それを記念して、関東と関西との中間地点「浜松」で60周年記念クラス会を行いました。関東から夫人２名と会員２名、関西からは会員７名、計９名の会員が集まりました。10年前の50周年クラス会には24名の参加があったのにと思うと、少し寂しく感じました。

浜松駅に集合し、迎えのバスでホテルに向かい、5時からの宴会まで一服しました。久しぶりの再会で互いの近況や健康・趣味などの話がはずみ、時のたつのを忘れ楽しい時間を過ごすことができました。

翌日は、朝９時にホテルを出発し、「航空自衛隊浜松広報館（エアパーク）（写真）」を見学しました。昼食は浜名湖名産の「うなぎ定食」をいただきました。食事中に来年以降の再会を約束し、解散しました。なお、時間と体力に余裕のある人は「浜松市楽器博物館」の見学にいきました。

（山下（通信・昭27）記）

NEOCOMM（新制通信28年度卒）西地区 平成23年度同窓会

日　時：平成23年５月16日（月）12：00～15：00
場　所：宝塚市　宝塚ホテル内「ソラレス」
出席者：
西地区（石井、井筒、浦野、大儀、川地、笹瀬
末田、大門、田中、田原、仲井、鍋嶋
藤原、古川、細馬、松井、安田）
東地区（塩崎、東島）特別参加
以上19名

八十路を迎えた会員の高齢化に伴い、今年から東地区、西地区に分け個別に開催することになり、西地区同窓会を５月16日宝塚にて開催しました。

久しぶりの参加者も加わり、予想を超える19名の参加を得て、楽しい歓談と旧交を暖めることができました。

お互いに健康に生きられる喜びを感謝しつつ、次回の再会を祈って散会いたしました。

（田中　記）

NEOCOMM（新制通信28年度卒）西地区 平成24年度同窓会

日　時：平成24年５月21日（月）12：00～15：00
場　所：宝塚市　宝塚ホテル内「ソラレス」
出席者：
西地区（浦野、笹瀬、末田、田中、田原、仲井
鍋嶋、藤原、古川、細馬、松井、森岡
安田）
東地区（塩崎）特別参加
以上14名

奇しくも国内では25年ぶりという金環日食が観測された同じ日の５月21日、平成24年度の西地区のNEOCOMM同窓会を恒例の宝塚に於いて開催しました。

会員の更なる高齢化に伴う健康上やその他の理由で

残念ながら参加されなかった会員も多かった中、14名の参加を得て１年ぶりの元気な再会を喜び合い和気藹々の雰囲気の中で賑やかに歓談と会食を楽しみました。

会の終了後開催地の歌劇のメッカ宝塚に因んだ「花の道」の散策を楽しんだ後、来年の卒業60周年記念同窓会での再会を誓って散会しました。

（田中　記）

信29会（通信昭和29年卒同期会）

日　時：2012年９月25日
場　所：東京、学士会館→スカイツリー
出席者：
前列左より　竹本、前川、北澤、秋山、磯崎、伏見
後列左より　小笠原、河村、岸本、板垣、竹本、的崎、由利、小羽根、嶋村、宮本、桑木、芝田、中村、桑木、日下、山口、前川、平本、瀧本、山中

信29会は最近２年毎に開いている。今年は、スカイツリーの開業など新しいものが見られるので、東京での開催となった。

メンバー43名（他14名没）のうち21名と６名のご家族の計27名が集った。旧交を温め、近況を報告しあい、和気藹々の会合であった。その後、NHKアイテックの矢田部長からスカイツリーの放送設備の概要を説明してもらった。スカイツリーでは、さらに４名のご夫人が参加された。荒川、隅田川の流れを俯瞰し、日の入りを眺め、最後は東京の夜景を楽しんだ。

２年後卒業後60周年となる会合を関西で予定する。

昭和34年電気卒同窓会

日　時：平成24年５月16日、12～15時
場　所：ホテル　グランヴィア京都
出席者：10名
写真左から
前列：今元、白藤、安江、松月、山田
後列：藤井、村田、生田、中野、小川

ここ数年、毎年開催されている昭和34年電気卒のクラス会が、今年度は村田・中野両君のお世話で、標記のホテルで開催された。懐石料理に舌づつみを打ちながら和やかな雰囲気のなか、近頃の話題である原発の再稼働や発・送電分離などについて話が盛り上がり、時の経つのも忘れて電気屋の本音を吐露し合った。

数年前に古希を迎えた歳になると身体のあちこちに不具合が出てくるのが普通で、同窓会ではそんな事が主な話題になることが多いのだが、今回は様子が全く異なり、今年一番の関心事である電力供給問題について語り合ったのは、時が時とは言え、電気技術者だけが味わえる至福の時であった。

次回以降をどのように続けるかも高齢のクラス会の重要な話題である。あまり間があくと、良い体調で出席できる者が減ってしまわないか心配になる。一方、毎年では同じ顔ぶれのクラス会に新鮮味が感じられないとの声もある。ともあれ現役を引退すると、出かける先が急減し、出身学校の同窓会や旧職場関係のOB会だけになりがちである。仕事で出かける機会がなくなった生活は侘びしいものなので、同じ顔ぶれであっても旧友に会う事は、若き良き日を懐かしむことができ、大きな楽しみである事は間違いない。

飛び交った色んな案を集約した結果、少人数でも参加者がある限り、毎年決まった日（５月16日）に東京組と大阪組が交互に企画することが結論された。次期幹事に小川・山田両君を選び、来年度の企画を人望厚い東京組の村井君に全面的に委嘱する事に決まった。意外性のある企画を楽しみに、再会を約して散会した。その後、下見までして準備してくれた村田君の案内で半数の者は東寺へ参拝した。

（文　白藤）

昭和37卒電子工学科（第一回生）卒業50周年同窓会

日　時：平成24年４月29日、30日
場　所：パナソニックリゾート大阪（吹田市）
出席者：
（後列左より）金子、有友、北野、蒲生、木谷、岸本
（前列左より）稲邑、秋山、高橋、玉置、有田、嶋田　　計12名

４月29日午後JR新大阪駅で集合し、東野田の工学部旧校舎へ。現在の大阪市立東高校、NTT西日本研修センターを訪問。後者は間もなく取り壊され改築されるとの事でおそらく見おさめとなった筈。NTTさんの計らいで中に入れて貰って記念撮影。左から７人目が橘。

翌日は豊中キャンパスで大阪大学ホームカミングデー、いちょう祭に参加、後は自由参加で総合学術博物館、吹田キャンパスの研究室などを見学して流れ解散。

50周年なので不参加者を含めた全員の近況紹介文集や写真集を作成しメール配信や郵送配布した。

（50周年同窓会幹事代表　稲邑清也）

電子昭和40年卒同窓会（関西）

日　時：平成24年９月１日（土）
場　所：うおまん　ヨドバシ梅田店
出席者：
（後列左から）花原、伊東、佐々木、清水、高橋、北本（上田）、小林
（前列左から）吉岡、赤坂、野添、谷口、野依
計12名

同期の同窓会は関東、関西と交互にやっていますが、今年は関西の年でしたが伊藤君が小田原から来てくれました。

最初に本年６月19日に亡くなった遠藤勲雄君に黙祷をいたしました。

あとは近況報告などを交え賑やかに盛り上がり、お酒も大いに進んで少し足が出ましたが楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

2015年は卒業50周年ということで、関東、関西合同でやろうということで散会しました。

（吉岡　記）

櫻井良文先生を偲んで

長年に渡って大阪大学工学部電気工学科、原子力工学科、基礎工学部制御工学科で研究教育に従事された櫻井良文先生が、昨年６月21日にご逝去になりました。

櫻井先生は1943年４月に大阪帝国大学工学部電気工学科に入学されましたが、戦時中のことでかなり変則的な学生生活を送られたと何度かお聞きしたことがあります。戦後間もなく1946年に同大学講師に就任され、教育・研究の道に踏み出されましたが、それからの研究の歴史は極めて広範囲な分野に広がっておられました。学者にはこの道一筋という研究者もおられますが、教育者として研究に取り組まれた櫻井先生は、幅広い分野をカバーすることで多くの学生に多大な影響を与えてこられました。先生が日頃から「自分は研究より人間が好きである」と言っておられたことがこの研究分野の広さにも通じるものと思われました。最初のご研究は応用磁気学というべき分野でした。例えば、磁気メモリの分野ではフェライトコアメモリ、パーマロイ薄膜メモリの研究から、磁区を制御して各種の微小機能素子を作ることを提案され、これを光磁気効果と結び付ける研究を進められて磁気バブルメモリに関する先駆的成果を挙げられました。また、希土類元素を含むアモルファス磁気膜の研究については米国と同時にバブル膜の作成に成功され、世界に先駆けてテリビウム鉄系膜の光熱磁気メモリとしての諸特性を明らかにされました。これらの成果は、コンピュータに不可欠な高密度光磁気ディスクの実用化を貢献され、国際的にも極めて高い評価を受けて来られました。先生が開拓された学問・技術は極めて広汎な分野に亘っていました。制御工学・制御機器・原子力機器などについて、顕著な成果を挙げておられます。中でも磁気増幅器のパワーエレクトロニクスへの応用ほか、原子炉制御、放射線計測及び軽水炉におけるボイドの測定などに優れた業績を挙げられておられます。

先生は1959年に工学部教授に就任された後、我が国で初めての基礎工学部の創設に尽力され、これまたわが国で初めての制御工学科を新設されました。当時、科学技術立国を目指していた日本において、電気関連の研究教育に力を注がれ、かつ関西の電器産業の振興のために多くの人材を輩出されてきました。また工学部と基礎工学部教授を併任され、阪大の評議員や京大原子炉実験所の教授も併任されるなど、ご活動の幅は広範に広がっていました。

その間学外では、第11－13期日本学術会議会員、日本自動制御協会会長、日本応用磁気学会会長など数々の要職を歴任されました。阪大を1984年に停年ご退官された後は、摂南大学工学部教授、同学長に就任されました。さらに1995年から1999年10月まで大阪工大学長の重責を務められました。

最後にひと言、櫻井先生から受けた強い印象を付け加えておきます。先生は人の顔と名前を覚えるのに長けておられたことにいつも感心したのを思い出します。卒業生の話が出るとき、お歳だから覚えておられないかなと思いきや、見事にどんなテーマを研究していて、誰々と同期だったなどと先生よりはるかに若い我々が舌を巻くような反応をされることがありました。ふつう卒業生から賀状が来てもかなりの数は記憶が疎かになっているものであるが、櫻井先生は工学部と基礎工学部の関係者を初め、数多くの学界、産業界関係者からの賀状からほとんどすべての方々を思い出しておられる様子を覗うことができた思い出があります。

こうして追悼文を書いているときも、櫻井先生が卒業生の皆さんの思い出を楽しそうに語っておられた様子が目に浮かびます。ここに改めて、櫻井先生のご逝去に対し、心から哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げます。

（井口征士（電気・昭37）記）

澪電会だより

平成24年度　電子情報工学科特別講演会
電子情報工学科入学・澪電会入会祝賀会

平成24年度で５回目となる電子情報工学科特別講演会　電子情報工学科入学・澪電会入会祝賀会が、昨年同様いちょう祭期間中の５月１日（火）に開催された。

講演会に先立って、10：00～15：00の間、工学部施設公開の一部として、また、電子情報工学科１年生配当講義「電子情報工学序論」の一環として、電気系全研究室の公開が行われた。一般来場者に交じって、電子情報工学科１年生が電気系研究室の最新の研究内容を見て回った。

電子情報工学科特別講演会は、15：00～17：00に、共通講義棟U3-211講義室にて開催された。電気電子情報工学専攻長・伊瀬敏史教授（電気・昭55）により「電力システムの将来と大学の役割」と題する講演が行われた。スマートグリッドをはじめとする電力系統の将来像と大学が果たしていくべき役割についてご示唆いただいた。続いて、ヒューマン・スマート代表取締役社長・下野　譲様（通信・昭41）より「おしゃれに生きる」と題するご講演を頂いた。ドコモ・モバイル㈱でのご経験も踏まえて、期待される人物像について熱くお語りいただき新１年生を激励して頂いた。電子情報工学科１年生127名、教員・一般聴講者10名、合計137名の聴衆が、熱心に講演に耳を傾けた。

講演会終了後、17：30～19：00には、学生食堂ファミール第２食堂において、電子情報工学科入学・澪電会入会祝賀会が開催された。兒玉了祐教授の司会のもと、澪電会会長・吉野勝美名誉教授（電気・昭39）による祝辞に続いて、講演会でお話いただいた下野様からも祝辞を頂戴した。この後、伊瀬敏史教授のご発声で乾杯が行われた。学部１年生の大多数が未成年であるため、お茶やジュースなどのソフトドリンクでの乾杯とあいなった。しばらくの歓談の後、三浦友史准教授の司会でクイズが行われた。電子情報工学科や澪電会にまつわる全15問の三択問題が出題され、１年生が回答した。成績優秀者には、図書カードが景品として贈られた。最後に、澪電副会長・北山研一教授（通信・昭49）の音頭による万歳三唱で締めくくりとなった。１年生109名、教員53名、大学院生スタッフ９名、合計171名が、楽しいひと時を過ごした。

（三浦友史（現教員）記）

平成24年度　総会・講演会・懇親会

平成24年６月１日（金）大阪梅田・新阪急ホテル「花の間」にて133名の参加者を得て開催された。総会に先立って「花の間」にて午後５時から平成24年度澪電会講演会が開催された。今回は、河崎善一郎教授から「雷に魅せられて」、村上孝三先生から「情報スーパーハイウェイへの坂道」と題してお話をいただいた。長年の研究成果と経験に基づいた大変示唆に溢れる講演であった。

引き続き平成24年度澪電会総会が午後６時30分より同じく「花の間」で行われた。吉野勝美会長（電気・昭39）の挨拶の後、森勇介総務幹事（電気・平元）から平成23年度事業報告が、また兒玉了祐会計幹事（電気・昭60）から平成23年度決算報告が行われ、それぞれ承認された。続いて藤野隆雄新副会長（通信・昭46）と新幹事18名の指名と承認がなされた。引き続き大森裕新総務幹事補佐（電気・昭47）から平成24年度事業計画案が、また森総務幹事から平成24年度予算案の説明が行われ、拍手をもって承認され無事終了した。

懇親会は午後７時より、会場「紫の間」に移して行われた。吉野会長の挨拶のあと、熊谷信昭　大阪大学元総長・名誉教授、大阪大学同窓会連合会長（通信・昭28旧）および亘信二　南海電気鉄道㈱代表取締役社長（通信・昭50）からご祝辞を頂戴した。その後、渡辺克信前会長（通信・昭42）の音頭で乾杯し、賑やかな歓談のひとときを持った。最後に白川功元会長（電子・昭46）のご発声のもと万歳三唱を行い、盛会裡に散会した。

（三浦友史（現教員）記）

平成24年度　第30回　澪電会見学会
大阪大学電気系３研究室／レーザー研究センター／総合学術博物館見学の実施報告

見学担当幹事：藤田尚徳、中井光男
日　時：平成24年11月13日（火曜日）9：00－17：00
見学先：大阪大学電気系３研究室
（吹田市山田丘１－１）
レーザーエネルギー学研究センター
（吹田市山田丘２－６）
総合学術博物館（豊中市待兼山町１－20）

レーザーエネルギー学研究センター

当日は朝９時に千里中央に集合した後、観光バスにて大阪大学吹田キャンパスに向かい、電気系３研究室の見学を、３班に分かれて行いました。伊瀬研究室では、伊瀬教授から太陽光発電・直流家庭送電・超伝導電力貯蔵等の電力・パワーエレクトロニクスに関する研究について説明を頂きました。尾崎研究室では、藤井准教授から有機光材料の開発について説明を頂くとともに、大学院生２名がポスターを使って研究発表を行いました。河崎研究室では、牛尾准教授から高速掃引が可能なXバンドフェーズドアレイドップラーレーダについて説明を頂くとともに装置の見学を行いました。学内のラシェーナにて昼食を取った後、レーザーエネルギー学研究センターにて、中井教授から高出力レーザーと高出力レーザーを用いた研究について説明を頂き、世界最大級出力のレーザー装置の見学を行いました。バスにて豊中キャンパスの総合学術博物館へ移動し、「待兼ワニ」の標本に驚くとともに、大阪大学の歴史について興味深く知ることができました。

（藤田尚徳（電気・昭49）記）

平成24年電気系卒業祝賀・謝恩会

平成24年度電気系卒業祝賀・謝恩会は平成25年３月25日（月）学位授与式当日の午後６時から、千里阪急ホテル・仙寿の間において開催された。卒業生出席者数250名（情報システム工学科目、情報科学研究科を除く）にご来賓、電気系職員、澪電会役員の方々をあわせて322名の出席者を得た。

式典の部は大森裕幹事（電気・昭47）の司会で進められ、最初に澪電会会長・大阪大学名誉教授・島根県産業技術センター所長の吉野勝美先生（電気・昭39）から祝辞を戴いた。ついで大阪大学同窓会連合会会長・大阪大学元総長・名誉教授の熊谷信昭先生（通信・昭28旧）、㈶地球環境戦略研究機関関西研究センター所長の鈴木胖先生（電気・昭33）、㈱エヌ・ティ・ティ・ドコモ取締役相談役の山田隆持様（通信・昭46）の御三方より来賓の祝辞を戴いた。最後に、電気系教員代表として、電気電子情報工学専攻長の伊瀬敏史先生（電気・昭55）から祝辞を戴いた。このあと、各支部からの祝電の披露があり、パーティーに移った。

パーティーの部は鎌倉良成（電子・平４）の司会で進められた。まず、朝日放送㈱代表取締役会長・澪電会前会長の渡辺克信様（通信・昭42）のご発声で乾杯し、歓談に移った。宴もたけなわの頃、吉野会長より楠本賞の山下真直君（先進電磁エネルギーコース）、工学賞の延堂拓也君（情報通信工学コース・通信工学クラス）、朝倉啓太君（量子電子デバイスコース）へ記念品の授与、部門推薦により大石貴章君（電気電子システム工学部門）、井上文彰君（情報通信工学部門）、東卓也君（量子電子デバイス工学部門）への景品授与があった。そのあと、恒例の福引き、お餅つきが賑やかに行われ、ついで卒業生の代表として情報通信工学コース・博士前期課程の井上文彰君から教員および澪電会諸先輩への感謝と将来への決意が述べられた。最後に澪電会副会長・電気電子情報工学専攻教授の北山研一先生（通信・昭49）の音頭で万歳三唱し、めでたく、祝賀・謝恩会はお開きとなった。

ご臨席賜り、祝辞を戴きましたご来賓の方々に厚くお礼申し上げます。また、ご多用中にもかかわらず、臨席戴きました電気系職員の方々にもお礼申し上げます。澪電会事務局の安井晴子様にはいつもながら献身的に会の準備にあたっていただき、さらには電気系秘書の方々、一部の学生諸君には準備・受付業務などをお手伝い戴きました。これらの方々に心よりお礼申し上げます。今年も快く記念品、福引きの景品を寄贈戴きましたNTTスマートコネクト㈱、㈱NTTドコモ、関西電力㈱、住友電気工業㈱、㈱ダイヘン、田淵電機㈱、㈱東芝、西日本旅客鉄道㈱、日本電気㈱、阪神電気鉄道㈱、㈱日立製作所、富士通㈱、三菱電機㈱、ルネサスエレクトロニクス㈱（社名50音順）の各社様に厚くお礼申し上げます。

（鎌倉良成（電子・平４）記）

平成24年澪電会東京支部総会報告

澪電会東京支部では、平成24年４月13日にメルパルク東京（東京都港区）にて支部総会および懇親会を開催しました。ご来賓として吉野勝美会長、北山研一副会長、辻毅一郎名誉教授、池田博昌工業会東京支部長、ご講演もお願いした宮原秀夫元総長にご臨席頂きました。電気系以外からのご参加を含め、総勢165名の盛会となりました。

講演会は、宮原先生より「インターネットは万能か？　－新世代ネットワーク実現の必要性－」のタイトルにて、情報通信研究機構理事長としてご推進されていた『新世代ネットワーク』の最新動向などをうかがう貴重な機会となりました。未来のネットワークとしてのインターネットの役割や、自然界における生物の行動パターンや脳内ネットワークなどから、新しいパラダイム、イノベーションを起こすことが新世代ネットワークの進むべき方向性であると熱く語られました。東京支部では、実は宮原先生に１年前の平成23年４月の東京支部総会でのご講演をお願いしておりました。ところが、東日本大震災の影響で総会の開催が６月に延期されたため先生のご都合がつかず、今回のご講演は２年越しでのご登壇ということになりました。その影響もあったのかもしれませんが、講演会場は満席となり立ち見が出るほどの盛況ぶりで、ご講演後も活発な議論が続きました。

第二部の懇親会では、開始に先立ち恒例の集合写真の撮影を行いました。今回はここ数年に比べて非常に多くの参加者があり、１回の撮影では写真に入りきらず、２回に分けての撮影となりました。また、冒頭の鶴保支部長の挨拶の中では、多くの方に参加していただいたことに対する御礼とともに、前半の講演会で宮原先生にご紹介いただいた新世代ネットワークのような最新の技術領域において、澪電会の会員および会員の属する企業が、これまで以上に大きく貢献していくことを期待するという話がありました。その後、ご来賓の吉野勝美会長、池田博昌工業会東京支部長からもご挨拶をいただき、北山研一副会長の音頭による乾杯と続いて参加者による懇談の場となりました。

また北山先生には、歓談の途中で『母校と澪電会の今』と題して最近の大阪大学の様子をスライドを交えてご紹介いただきました。母校をしばらく訪問していない参加者も多かったと思いますので、一部リニューアルされた建物など工学部の今の様子を含めて、参加者一同大変興味深く拝見させていただきました。さらに、昭和38年電気卒の木村孝之様から、立ち上げて間もない大阪大学卒業生の技術士会のご紹介などもあり、多数の参加者の間で笑いや歓声の飛び交う歓談が続きました。

会の終盤には、本年総会幹事会社を務めた２社から、山元正人氏（NEC）、岡進氏（三菱電機）の挨拶があった後、次回総会幹事会社の鳥居直哉氏（富士通）と氏原茂氏（NHK）から来年に向けた力強い決意表明と万歳三唱によって、大盛況のうちに総会のすべての予定を無事終了いたしました。

（今井恵一（通信・昭54）、斧原聖史（通信・平12）記）

平成24年度東海支部総会・見学会報告

澪電会東海支部は、平成24年10月６日（土）、見学会、支部総会および懇親会を開催しました。ご来賓として澪電会会長の吉野勝美先生、副会長の藤野隆雄先生、総務幹事の大森裕先生にお出で頂きました。支部からは片山正昭東海支部長（電子・昭56）をはじめ、昭和32年度卒から平成20年度卒までの32名の支部会員、会員家族８名（見学会のみ参加）を加え、合計43人の盛会となりました。

当日は常滑市・中部国際空港に集合し、「とくべつセントレアまるわかりツアー滑走路見学コース」に参加しました。このツアーは、国内で唯一、通常関係者以外立ち入りを制限している空港エリアを見学できるものです。また、団体貸切バスのみを対象としていることから、東海支部で企画することとなりました。ツアーでは、まず、身分証明確認、手荷物検査、ボディーチェックとセキュリティー検査があり、飛行機搭乗さながらでした。バスに乗り込み、会員およびその家族で和気あいあいと楽しい雰囲気で空港島内に移動しました。また、添乗員による空港、飛行機機体に関する詳細な説明があり、知識を深めることができました。一部エリアではバスから降りて間近に飛行機の離発着を見ることができました。特に、着陸時の飛行機と滑走路の摩擦による白煙、エンジンの逆噴射などは大迫

力で、飛行機に乗っているときには味わえないものでした。

総会、懇親会は、まるは食堂りんくう店で開催されました。総会では、片山支部長による開会の御挨拶の後、吉野澪電会会長から御挨拶を頂戴しました。実体験に基づく同窓会組織の大切さに関するお話が印象的でした。議事に入り、山口代表幹事より活動報告および計画が報告されました。次に、高田会計幹事より提出された予算案が原案通り承認されました。議事終了後、大森先生より「母校と澪電会のいま－電気系教室創立から104年－」という題で、母校の動向について概説しました。内容は、大学および大学院の入試に始まり、電気系人気の回復、電気系校舎の建て替え・改修工事の終了など、電気系教室の近況に加え、澪電会活動状況についてでした。

懇親会では、藤野隆雄澪電会副会長（電気・昭和46）のご挨拶で乾杯し、来賓と会員、会員相互で話が弾み、田部力氏（電気・昭和32）の音頭のもと、拍手で懇親会を終えました。

（平田晃正（通信・平８）記）

平成24年度澪電会北陸支部総会報告

澪電会北陸支部は、９月29日（土）に、第23回支部総会を富山駅近くのアーバンビル会議室にて開催し、その後、北陸電力株式会社の富山太陽光発電所及び北日本新聞社の「創造の森越中座」において新聞製作工程の見学会を行いました。本部からは、吉野勝美会長、大森総務幹事をご来賓にお迎えし、総会は13名の参加となりました。

当日はJR富山駅北口に11時45分に集合し、駅から徒歩１分の総会会場となるアーバンビル会議室に向かい、到着後すぐに昼食としました。そして、12時30分から支部総会を開催いたしました。木下支部長の挨拶で始まり、吉野会長に挨拶いただいた後、平成23年度の事業報告と会計決算報告を行いました。続いて、平成24年度の事業計画案、予算案の審議、了承をいただいた後、大森総務幹事から本部報告をいただきました。総会の後、貸切バスにて市内を移動し、富山太陽光発電所及び「創造の森越中座」を見学いたしました。富山市婦中町上轡田にある発電出力1,000kWの富山太陽光発電所では、北陸電力の担当の方から、再生エネルギーの導入による低炭素社会の実現に取り組む北陸電力の意気込みを聞き、参加者全員が感心しました。次に、富山市婦中町本郷にある「創造の森越中座」では、北日本新聞の担当の方から、新聞の製作工程全般や最新のオフセット印刷の説明を聞き、新たな知識を得ることができました。

午後４時に見学会を終了後、総会を開催したアーバンビルの14Fにある料理懐石「連山岩くら」に場所を移し、懇親会を開催しました。吉野会長の乾杯の音頭に始まり、富山湾の新鮮な食材に舌鼓を打ちながら会員相互の近況報告を行うなどして、親睦を深めました。和気あいあいの懇親会もあっという間に時間が経ち、無事に今年度の支部総会を終えることができました。

来年度以降は、特に若い会員の方々に参加をお願いしたいと思っています。多数の会員の方々にご出席いただいて盛会となるように、宜しくお願いいたします。

（熊田一雄（基電・昭60）記）

平成24年度澪電会中国支部総会について

澪電会中国支部では、10月22日（土）、中国電力㈱福山太陽光発電所を見学後、福山プラザホテルにおいて支部総会を開催しました。本部から、吉野勝美会長、総務幹事の中井光男先生をご来賓としてお迎えしました。また、中国支部からは、岩川泰而（電昭34）、中司浩生（通修昭35）、八十島義行（電昭40）、白髭修一（電修昭46）、朝山修（電昭48）、福島透（基礎工昭56）、三川玄洋（通平３）、梶山勝哉（通平５）、末盛崇（電平７）、増岡裕樹（通平11）、福本直紀（通平16）、稲葉大剛（電平18）の12名の方にご出席いただき、合計14名の盛会となりました。

当日は、JR福山駅に集合後、バスで広島県福山市箕沖町にある中国電力㈱福山太陽光発電所へ移動し、16,544枚の太陽光パネルを見学しました。同発電所は2011年12月に営業運転を開始した中国電力初のメガソーラー発電所です。

当日は晴天に恵まれ、発電量が時々刻々と変化する様子を、見学用展望台の発電量表示パネルから見学することができました。また、季節や天候による発電量の変化、５月21日の金環日食時の発電量の変化から、太陽光発電の特徴を解説していただき、技術力の向上につながりました。

見学会終了後、バスで福山市住吉町にある福山プラザホテルへ移動し、支部総会を開催しました。総会では、吉野会長からご挨拶をいただくとともに、中井光男先生から、母校の近況についてご紹介いただきました。

総会後の懇親会では、一人ずつ自己紹介と近況報告

を行うことができ、短い時間ではありましたが、和気あいあいと有意義な時間を過ごし、来年度の再会を期して散会となりました。

今年度も、多数の方にご出席いただき、盛会とすることができました。ご多忙の中、ご出席いただきました皆様方に感謝申し上げます。来年度も同時期に開催する予定ですので、多数ご出席下さいますようお願い申し上げます。

（福本直紀（通平16）記）

平成24年度　澪電会四国支部総会　議事録

四国支部では、平成24年11月10日（土）に、設備見学会と総会・懇親会を徳島県徳島市で開催しました。昨年11月に続き、７年連続での開催でした。

当日は、晴天に恵まれ、本部より吉野勝美会長、大森裕幹事をご来賓としてお迎えし、四国支部からは坂入修二支部長をはじめ14名の参加者を得ることができました。

まず、徳島大学常三島キャンパスに集合した後、原口雅宣支部会員の案内で徳島大学工学部の設備見学を行いました。徳島大学工学部は、光応用光学科はじめ７学科を有するとともに、企業からの寄付講座や地域産学官共同研究拠点を設置しており、産学官の連携に積極的に取り組まれておりました。フェムト秒レーザー装置やMOCVD装置等の研究設備の見学の中では、採用している装置・素子や、設備のランニングコスト等に関して、活発な質問がありました。また、金属内の自由電子と光の結合の利用による、回折限界を超えた素子開発に向けた研究の紹介では、非常に興味深い内容に、一同真剣に聞き入っておりました。

次に、徳島駅近くにある会場に移動し、総会と懇親会を行いました。総会では、幹事の山間の司会で、坂入支部長の挨拶から始まり、吉野会長からのご挨拶、大森幹事からの母校近況報告を頂きました。

坂入支部長からは、参加頂いたご来賓や支部会員へのお礼や、今後とも支部活動を活性化していきたいという抱負。吉野会長からは、震災以降の電気系業界を取り巻く環境についてのご紹介や、母校をサポートする体制づくりのお願い。大森幹事からは、母校の学科・研究室の組織や入学者の状況、澪電会本部の活動状況等を伺うことができ、非常に有意義な情報共有の場となりました。

引き続き議案審議に移り、山間より平成23年度の決算、平成24年度の活動計画や予算、および幹事交替等の議案を提案し、全会一致で承認され、総会は無事に終了いたしました。

総会の後、懇親会に移り、山下一彦元支部長の乾杯の音頭により、懇談に入りました。頃合いを見計らい、参加者による自己紹介と近況報告を行いました。皆さんお話好きの方ばかりで、例年にもれず全員が話し終わるころには、終了予定時刻となり、坂本明雄幹事の音頭で万歳三唱を行い、お開きとなりました。

ご多忙の中、ご出席いただきました皆様方に感謝し、御礼申し上げます。

（山間昭典（電・昭63、電修・平２）記）

平成24年度澪電会九州支部総会報告

澪電会九州支部では、支部総会および懇親会を10月27日（土）・28日（日）に開催いたしました。本部より会長の吉野勝美先生、会計幹事の中前幸治先生にご出席賜りました。

九州支部からは河村寿三（気昭29）、永田重幸（気昭36）、田中祀捷（気昭37）、金藤敬一（気昭46）、高木精志（気昭48M）、三谷康範（気昭56）、小森望充（基礎工昭57）、服部励治（気昭61）、吉水清文（気昭62）、中村健一（気昭63）、藤村高志（通平元）、小杉成史（気平５）、園田彰三（気平７）、田口彰（気平７）、渡邊政幸（気平13）が出席しました。

今年度は九州新幹線全線開業記念第二弾として福岡県朝倉市で開催しました。古処山の麓にひっそりと佇

む秋月城跡を訪ね、残念ながら当日はすでに稲刈りも終わって止まっていましたが三連水車を見学しました。筑後川沿いにたたずむ福岡の奥座敷、原鶴温泉にて支部総会および懇親会を執り行いました。

総会では金藤支部長からのご挨拶のあと、支部事業ならびに会計報告を行い、原案どおり承認されました。金藤支部長の退職に伴い、次期支部長として三谷康範氏への交替が提案され、満場一致で承認されました。その後、本部からお越しの吉野先生からご挨拶を賜りました。続いて、中前先生からは母校と澪電会本部の近況をご報告いただき、電気系や澪電会の様子をうかがい知ることができました。懇親会には、誠に残念ながらご多忙につき吉野先生にはご参加いただくことができず、出席者一同大変心残りでした。恒例となりましたが金藤支部長から参加者一人ずつにお手製の母校の校章入り焼きものが贈呈されました。短いひとときでしたが、各参加者から自己紹介と近況報告を行いつつ、話題のつきない中で楽しい時間を過ごすことができました。

ご多忙の中、ご出席くださいました皆様方に感謝申し上げます。この輪を拡げるべく、九州地区にお知り合いの会員がおられましたら是非ともお声掛けください。とくに若手の会員の方々のご参加をお待ちしております。今後とも会員皆様のご参加とご協力を切にお願い申し上げます。

（渡邊政幸（電気・平13）記）

澪電会　賛助会員（サポート企業）募集について

陽春の候、会員の皆様方には益々のご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は本会の活動にご理解とご支援を賜りまして、厚くお礼を申し上げます。

さて、澪電会は会員の親睦を図り、学術の発展および科学技術に関する知識の啓発に寄与することを目的とし、適宜必要な事業活動を行ってきております。澪電会は明治45年から大正２年頃に結成されて（第１回会報　山口次郎「澪電会小史」より）以来、今や約9,000名の会員を擁する大きな組織となり、会報発行、卒業謝恩会、見学会、新入生歓迎会、講演会そして支部活動と活発に活動しております。平成24年度より、電子メイルによる会員の皆様への情報発信も開始を予定しております。しかし、残念ながら運営の基盤となる会費納入不振のため、財政が極めて厳しい状況になっております。

このような状況のもと、澪電会では、会の趣旨に賛同し、その運営を援助することを目的とする賛助会員（会費年額50,000円／一口以上）を企業の方を対象に募ることとなりました。澪電会の会則には、すでに賛助会員が含まれております。

澪電会にご関係いただく企業の皆様におかれましては、この機会に是非とも澪電会賛助会員にご加入頂けますよう、ご検討の程、よろしくお願い申し上げます。なお、ご賛同していただけますと、賛助会員企業（サポート企業）であることを澪電会会員に活動を通じて周知いたします。例えば、電子メイルによる案内では、サポート企業名とそのキャッチフレーズ（１行から２行）をメイル文の最後の方につけて賛助会員企業を周知いたします。

ご賛同していただける場合には、澪電会事務局までお知らせください。

e-mail:reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

申込用紙を電子メイルにてご送付させていただきます。

なお、本会に関するご意見やご希望がございましたら、ご遠慮なくお聞かせ下さい。皆様のご協力をお願いいたします。

現在、以下に示します企業の皆様から、ご支援をいただいています。

株式会社ダイヘン　　http://www.daihen.co.jp/

電力供給から金属加工、半導体製造分野まで、社会のニーズに応える先進のものづくりで、ダイヘンは社会の発展に貢献します。

匿名企業　１社

クラス委員

（電気工学科・電気工学科目・電気工学専攻）

学部	修士	
昭和12年		落合　岩男
16年		高田　源次
20年		樋口　正樹
22年		山下　義美
23年		山中千代衛
24年		甲佐　史郎
25年		辻　　良夫
26年		近藤　道治
27年		木本　保夫
28年旧		藤井　克彦
28年新	30年	辻　　三郎
29年	31年	升田　公三
31年	33年	寺崎　泰彦
32年	34年	大川進一郎
33年	35年	鈴木　　胖
34年	36年	白藤　純嗣
35年	37年	松浦　虔士
36年	38年	濱口　智尋
37年	39年	黒田　英三
38年	40年	山中　龍彦
39年	41年	武藤　成生
40年	42年	赤澤　堅造
41年	43年	辻　毅一郎
42年	44年	佐々木孝友
43年	45年	朴　　炳植
44年	46年	谷内田正彦
45年	47年	織田　守昭
46年	48年	土師　總一
47年	49年	大森　　裕
48年	50年	原　　格
49年	51年	田中　和夫
50年	52年	伊藤　利道
51年	53年	木村　紀之
52年	54年	山本　正純
53年	55年	阪部　周二
54年	56年	白神　宏之
55年	57年	伊瀬　敏史
56年	58年	三谷　康範
57年	59年	裏　　升吾
58年	60年	尾崎　雅則
59年	61年	江川　泰弘
60年	62年	秋葉　龍郎
61年	63年	服部　励治
62年	平成元年	佐伯　　修
63年	2年	藤井　龍彦
平成元年	3年	森　　勇介
2年	4年	仙井　浩史
3年	5年	舟木　　剛
4年	6年	岩井　　真
5年	7年	藤田　和久
6年	8年	板垣　鉄平
7年	9年	川瀬　博基
8年	10年	斎藤　貴光
9年	11年	中島　弘朋
10年	12年	矢野　雅一
11年	13年	緒方　晋也
12年	14年	山下　勝則
13年	15年	小谷　研太
14年	16年	犬伏　雄一
15年	17年	小島　鉄也
16年	18年	坂本　雅樹
17年		村井　良多
18年		吉田　　央
19年		大曲　祐子

（通信工学科・通信工学科目・通信工学専攻）

学部	修士	
昭和18年		藤澤　和男
19年		黒田　一之
20年		滑川　敏彦
21年		来住　　徹
25年		竹内　信雄
26年		長岡　崇雄
28年旧		福井　淳一
28年新	30年	末田　　正
29年	31年	由利　宏二
30年	32年	倉橋浩一郎
31年	33年	栗岡　　豊
32年	34年	長谷川利治
33年	35年	宮道　　繁
34年	36年	樹下　行三
35年	37年	西原　　浩

36年	38年	野村　康雄
37年	39年	真田　英彦
38年	40年	中西　　暉
39年	41年	塩澤　俊之
40年	42年	藤岡　　弘
42年	44年	宮原　秀夫
43年	45年	玉川　允敏
44年	46年	池田　雅夫
45年	47年	中野　秀男
46年	48年	里村　　裕
47年	49年	森下　克己
48年	50年	河崎善一郎
49年	51年	北山　研一
50年	52年	樺澤　　哲
51年	53年	鬼頭　淳悟
52年	54年	井上　　健
53年	55年	中野　幸男
54年	56年	馬場口　登
55年	57年	秦　　淑彦
56年	58年	片山　正昭
57年	59年	榎原　博之
58年	60年	山本　　幹
59年	61年	平　　雅文
60年	62年	原　　晋介
61年	63年	大川　剛直
62年	平成元年	荒木　範行
63年	2年	戸出　英樹
平成元年	3年	堀井　康史
2年	4年	松田　洋一
3年	5年	畑　　真司
4年	6年	上田　哲也
5年	7年	安部田貞行
6年	8年	村上　智己
7年	9年	池田　武弘
8年	10年	加藤　　真
9年	11年	菅原　弘人
10年	12年	中西　淳平
11年	13年	門田　行広
12年	14年	新熊　亮一
13年	15年	東野　武史
14年	16年	村越　昭彦
15年	17年	藤本　正樹
16年	18年	木下　幸裕
17年		山本　勇樹
18年		森岡　康史
19年		工藤　隆則

（電子工学科・電子工学科目・電子工学専攻）

学部	修士	
昭和37年	39年	蒲生　健次
38年	40年	白川　　功
39年	41年	尾浦憲治郎
40年	42年	吉岡　信夫
41年	43年	鷹岡　昭夫
42年	44年	打田　良平
43年	45年	春名　正光
44年	46年	藤原　秀雄
45年	47年	杉本　哲夫
46年	48年	谷口　研二
47年	49年	千葉　　徹
48年	50年	栖原　敏明
49年	51年	村上　敬一
50年	52年	山田　伸一
51年	53年	西川　博昭
52年	54年	中前　幸治
53年	55年	岡田　満哉
54年	56年	薮内　康文
55年	57年	太田　快人
56年	58年	出口　　弘
57年	59年	河合　利幸
58年	60年	森　　俊彦
59年	61年	正田　博司
60年	62年	綿森　道夫
61年	63年	森　　伸也
62年	平成元年	重弘　裕二
63年	2年	藤村　昌寿
平成元年	3年	野口　栄治
2年	4年	赤坐　正樹
3年	5年	上野　隆範
4年	6年	三浦　克介
5年	7年	藤井　彰彦
6年	8年	上向井正裕
7年	9年	上野　弘明
8年	10年	梶井　博武
9年	11年	野田　研二
10年	12年	島田　尚住
11年	13年	藤澤　猛史
12年	14年	大竹隆太郎
13年	15年	小野　俊明
14年	16年	三上　真範
15年	17年	樋渡　伸二
16年	18年	松久　裕子
17年		尾島　正禎

18年		六車　充
19年		田村　悠

（情報システム工学科、情報システム工学科目、情報通信工学科目・情報システム工学クラス、情報科学研究科）

学部	修士	
平成５年	７年	一階　良知
６年	８年	安部　敬一
７年	９年	原　隆浩
８年	10年	池内　智哉
９年	11年	相坂　一樹
10年	12年	密山　幸男
11年	13年	中尾　太郎
12年	14年	工藤　祐介
13年	15年	兼田　佳和
14年	16年	義久　智樹
15年	17年	庄島　大基
16年	18年	渡辺　賢治
17年	19年	野里　良裕
18年	20年	村尾　和哉
19年	21年	高島　真彦
20年	22年	尾崎　麻耶
21年	23年	中川　将史
22年	24年	山崎　公敬
23年	25年	林　勇介

（電気電子工学科目・システム制御電力コース、電気電子情報エネルギー工学専攻・システム制御電力工学コース）

学部	修士	
	平成20年	吉田　央
	21年	大曲　祐子
平成20年	22年	大道　哲二
21年	23年	三宅　翔太
22年	24年	赤尾　雅嗣
23年	25年	大石　貴章

（電気電子工学科目・先進電磁エネルギーコース、電気電子情報工学専攻・先進電磁エネルギー工学コース）

学部	修士	
	平成20年	馬場　政志
	21年	畠山　幹生
	22年	遠藤　恭
	23年	田中　聡一
	24年	横山　尚也
	25年	中塚　和樹

（情報通信工学科目・通信工学クラス、電気電子情報工学専攻・情報通信工学部門）

学部	修士	
	平成19年	山本　勇樹
	20年	森岡　康史
	21年	工藤　隆則
平成20年	22年	木村　共孝
21年	23年	十河　泰弘
22年	24年	西村　悟史
23年	25年	井上　文彰

（電気電子工学科目・量子電子デバイスコース、電気電子情報工学専攻・量子電子デバイス工学部門）

学部	修士	
	平成19年	尾島　正禎・村井　良多
	20年	六車　充
	21年	田村　悠
平成20年	22年	堀　哲郎
21年	23年	小川　康宏
22年	24年	石川　裕之
23年	25年	東　卓也

クラス委員の変更等ございましたら、事務局まで随時ご連絡下さるようお願いいたします。

澪電会　会則

会　則

第１条　本会は澪電会と称する。

第２条　本会は事務局を大阪大学大学院工学研究科電気系内に置く。

第３条　本会は会員の親睦を図り、学術の発展および科学技術に関する知識の啓発に寄与することを目的とし、そのため適宜必要な事業を行う。

第４条　本会の会員はつぎのとおりとする。

(1) 正会員

イ．大阪大学工学部、工学研究科および情報科学研究科ならびにその前身である学校の電気系卒業生。

ロ．大阪大学工学部および工学研究科の電気系現教員。

ハ．大阪大学工学部電気系教官および教員の主査のもとで学位を得た者で、本会に入会を希望する者。

ニ．特に本会に縁故があり、役員会の承認を得た者。

(2) 特別会員

正会員以外で大阪大学工学部電気系の教授、助教授、准教授および講師であった者ならびに特にこの会に縁故のある者。

(3) 学生会員

大阪大学工学部、工学研究科および情報科学研究科の電気系学生。

(4) 賛助会員

本会の活動を援助する法人または個人。

第５条　本会に次の役員、委員を置く。

会長　１名

副会長、幹事、クラス委員

第６条　会長は総会の議を経て選出する。副会長、幹事については会長が指名し、総会で承認を得る。クラス委員については別表に従って卒業・修了年別に選出する。

第７条　会長は本会の会務を総括し、本会を代表する。副会長は会長を補佐する。

第８条　会長、副会長、幹事は役員会を組織し、会務を処理する。クラス委員はクラスを代表し、本会に関する重要事項の相談にあずかる。

第９条　役員会の推薦により、本会に顧問を置くことができる。

第10条　役員の任期は２年とする。ただし重任はさまたげない。

第11条　定例総会は年１回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。定例総会では事業報告、会計報告および役員改選その他の議事を行う。

第12条　本会の事業年度、会計年度は毎年６月１日に始まり、翌年５月31日に終る。

第13条　正会員は別に定めた規定により、会費を毎年７月末日までに納入しなければならない。

第14条　本会は必要に応じて支部を置くことができる。

第15条　本会則の変更は総会の議決を経て行う。

細　則

・会費は年額4,000円とする。(平成７年度より実施)

・大学学部卒業時から53年を経過した会員は、会費の納入を要しない。

別表

クラス委員選出単位

卒業年	学部
平成11年以前	電気工学科、通信工学科、電子工学科、情報システム工学科の各学科卒業生から１委員／年
平成12年～平成21年	電子情報エネルギー工学科電気工学科目、通信工学科目、電子工学科目、情報システム工学科目の各学科目卒業生から１委員／年
平成22年以降	電子情報工学科システム・制御・電力コース、先進電磁エネルギーコース、量子電子デバイスコースの各コース卒業生から１委員／年、及び、情報通信工学コース・通信工学クラス、情報通信工学コース・情報システム工学クラスの各クラス卒業生から１委員／年

修了年	大学院
平成15年以前	電気工学専攻、通信工学専攻、電子工学専攻、情報システム工学専攻、電磁エネルギー専攻、電子情報エネルギー工学専攻の６専攻修了者から４委員／年
平成16年～平成18年	電気工学専攻、通信工学専攻、電子工学専攻、電子情報エネルギー工学専攻の４専攻修了者から３委員／年、及び、情報科学研究科（電気系８講座）修了者から１委員／年
平成19年以降	電気電子情報工学専攻システム・制御・電力工学コース、先進電磁エネルギー工学コース、情報通信工学コース、量子電子デバイス工学コースの各コース修了者から１委員／年、及び、情報科学研究科（電気系８講座）修了者から１委員／年

注）学部のクラス委員は、関連する大学院のクラス委員を兼任する。

澪電会　プライバシーポリシー

澪電会では、会員の皆様から事業推進に際して必要最小限の個人情報をご提供頂き、同窓会活動に利用して参りました。会員の皆様の個人情報の取り扱いにつきまして下記の通りご案内致します。会員の皆様のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1．保有する会員の個人情報と個人情報収集方法、利用目的

澪電会（各支部を含む）（以下、本会と称する）が運営上取得した下記の情報を個人情報として取り扱います。

氏名、会員番号、卒業（修了）学部・学科・学科目・研究科・専攻・コース・研究室、卒業（修了）年度、自宅連絡先（住所、電話／FAX番号、電子メールアドレス）、勤務先（勤務先名称、住所、所属部署、役職、電話／FAX番号、電子メールアドレス）等

また本会では、その会則に示す目的のとおり、「会員の親睦を図り、学術の発展および科学技術に関する知識の啓発に寄与することを目的とし、そのため適宜必要な事業を行う」こととして、会員個人情報を以下に示す事業において利用します。

① 本会会員名簿の整備および発行。
② 本会および本会会員が主催する事業で本会の目的に適ったもの（総会、見学会、同窓会等）の案内およびそれにかかる連絡事項の送付。
③ 会報等（電子媒体によるものを含み、本会活動目的に適うものに限る）の配布。
④ 会費および寄付金の収受管理、会費徴収に関わる事務、案内。
⑤ 大阪大学が行う教育・研究の発展に寄与すると判断される大阪大学主催事業の案内送付。

2．個人情報の管理と第三者への開示と提供

(1) 本会が収集した個人情報については、本会により適正に管理を行い、常に個人情報の保護に努めます。
(2) 本会は、前項①～⑤に示す事業推進において、本会から事業委託された業者等が対応することが適切と判断される場合には、業者等に対して必要最小限の個人情報を開示ならびに提供することがあります。また、大阪大学ならびに大阪大学同窓会連合会等同窓会組織の主催事業で、その利用目的から個人情報の提供が適切と判断される場合には、大阪大学ならびに大阪大学同窓会連合会等同窓会組織に対して必要最小限の個人情報を提供することがあります。なお、個人情報の開示もしくは提供を望まない場合は、本会まで届け出て下さい。届け出のない場合は、原則として「開示可・提供可」として取り扱わせて頂きます。
(3) 本会から提供する個人情報は紙媒体もしくは電子媒体によるものとします。
(4) 上記(2)および次の場合を除き、あらかじめ会員本人の事前の同意がない限り、個人情報を第三者へ開示ならびに提供致しません。
- 法令に基づく場合
- 人の生命、身体又は財産の保護のために必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるとき。
- 公衆衛生の向上又は児童の健全な育成の推進のために特に必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるとき。
- 国の機関若しくは地方公共団体又はその委託を受けた者が法令の定める事務を遂行することに対して協力する必要がある場合であって、本人の同意を得ることにより当該事務の遂行に支障を及ぼすおそれがあるとき。

3．開示・訂正・利用停止請求

本会は、会員から会員本人の個人情報に関する開示請求の申し出があった場合は、当該本人と確認したうえで、その情報の開示を行います。また、内容が正確でないなどの申し出があった際には、その内容を確認の上、必要に応じて個人情報の追加、変更、訂正または利用停止を行います。

4．澪電会に関する個人情報のお問い合わせ・ご依頼先

〒565-0871　吹田市山田丘2-1
大阪大学　大学院工学研究科　電気系内　澪電会事務局
電話　06-6879-7789　　FAX　06-6879-7774　　E-mail　reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

講演会

総会

懇親会

平成24年度　卒業祝賀会・謝恩会

平成24年度 大阪大学電気系卒業祝賀・謝恩会

編　集　後　記

会報澪電No.34を致します。東日本大震災より、はや２年が過ぎました。被災地の復興だけでなく、原子力発電所停止による全国的な電力不足、電力・情報通信のインフラの防災対策などもあいかわらず課題となっております。しかしそのために、近年例を見ないほど「電気電子情報通信」の分野が注目を集めていることも確かです。「電気電子情報通信」の専門家集団でる澪電会といたしましても、その社会の期待に応えるべく、問題の解決に貢献して参りたいものです。また、われわれ幹事一同も澪電会の活動がさらに円滑かつ活発になりますよう努力していく所存ですので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりますが、ご多忙中にも関わらず、本誌記事の執筆を快くご承引下さいました執筆者の皆様、ならびに編集にご協力下さいました皆様に、心より感謝の意を表します。

（編集幹事：三浦友史、鎌倉良成、
橋本昌宜、松田崇弘）

発行　澪電会
〒565-0871　吹田市山田丘2-1
大阪大学大学院工学研究科電気系内
電　　話：06-6879-7789（ダイヤルイン）
ファックス：06-6879-7774
電子メール：reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp